

検討に用いた資料 —札幌らしい特色ある学校教育の実践事例—

1-1 各テーマの取組概要

(1)雪

スキー学習

札幌市にはスキー場やスケートリンクなどの施設があり、小学校では、冬になるとグラウンドにスキー山が作られるなど、充実した環境の中で学習を進めることができる。学習指導要領では、保健体育科の内容の取扱いにおいて「自然とのかかわりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、地域や学校の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする。」と示されており、中学校における平成24年度の学習指導要領の全面実施により、保健体育の授業時数が現行の90時間から105時間に増えるのを機に、各学校においてスキー学習が実施されてきたところである。

札幌市教育委員会では、懸案となっているスキー学習に伴う保護者の経費負担軽減のため、スキー用具のリサイクル事業を実施したり、レンタルスキーの活用方法などについてモデル校事業を通じて実践研究を行い、その成果を発信したりするなど、観光文化局スポーツ部やスキー場関係者、関係団体と連携しながら札幌市におけるスキー学習の一層の拡充を目指してきたところである。

幼稚園における冬の活動

幼児が主体的に雪に親しみ、全身で十分に活動に浸ることによって、北国の長い冬の季節を元気に過ごすことができる。幼児期は、教師との信頼関係に支えられて自分でやってみようという気持ちをもつことができることから、幼児の興味関心に基づいた環境構成をするとともに、教師も一緒になって雪遊びを楽しむことで、より一層活動への意欲が喚起され、心からの充実感や満足感につながる活動となっている。

雪中運動会・アイスクャンドル

学校行事や特別活動で「スノーフェスティバル」を開催し、その中で、雪中運動会や雪像作りなどに取り組んできている。雪を活用してダイナミックに活動することを通して、仲間意識を深め、異年齢での人間関係を高めることができた。また、地域でのアイスクャンドル作りなどの取組に参加することによって、地域社会の一員としての自覚をもち、キャンドルの温かい灯りに包まれる中で「優しく温かいまちづくり」へ向けた「共感・共生」の心を養うことができた。

除雪などのボランティア活動

雪が降っている朝に、高学年の児童が、登校してきた下級生の体に着いた雪を優しく払ったり、玄関前の除雪を行ったりするなど、雪を介して、支え合いの精神を育む札幌らしいボランティア活動を充実させてきているところである。また、地域の除雪ボランティアや砂まきボランティアの取組は、児童生徒の社会参加のきっかけともなる機会となりこうした活動を積極的に広げることができるよう、学校と地域が相互に連携し協力していく姿

が見られた。

雪に関する学習

教科等の学習の中でも、冬の札幌の気候や除雪の仕組みについて学習するなど、冬（雪）を題材とした学習を進めてきたところである。小学校6年「暮らしと政治を調べてみよう」では、札幌市雪対策室や各区の土木部と連携し、写真資料や雪に関する資料の提供を得て「除排雪について考える」学習を効果的に進めることができた。また、中学校2年理科「天気の変化」では、実際に人工雪発生装置を作成し、雪に対する興味関心をもたせることから、冬の天気の学習につなげていくことができた。

総合的な学習の時間の中で、札幌オリンピックミュージアム（旧札幌ウィンタースポーツミュージアム）等の施設の活用も見られた。

校種間の連携

生徒会雪遊びボランティア活動について、本校生徒会執行部が「雪遊びボランティア」を全校から募り、幼稚園や地域ボランティアと連携して、地域の小さな子どもたちと一緒に外で遊ぶ活動が伝統的に行われている取組も見られる。また、スノーキャンドルの制作では、園児たちと一緒に作る取組がみられ、作り方を教える際の関わり方も見えてきた。制作当日へ向け、キャンドルカバーに使うペットボトル集め、ポスターの原版作成などを行い、当日、園児達と楽しく交流が出来た。教えて、やらせてあげて、直してあげるなど、立派なお兄さん、お姉さんぶりであった。こうした幼稚園児と小学生が連携しながら雪を楽しんでいる姿が見られた。

教科連携による取組

特別活動の一環として、学校の玄関前の除雪や、学校前の通学路の除雪、地域のゴミステーション周りの除雪等地域への奉仕活動も含めた取組を計画し、札幌市教育委員会が推進する「さっぽろっこ雪かき・汗かきチャレンジ」と連動しながら実施した。土木センターに出前講座をお願いし、除排雪のしくみや問題点など、プレゼンやDVDを通して分かりやすくお話しいただいた。普段、登下校時に歩く通学路の歩道がどのように除雪されているか、またその作業が深夜早朝などに行われることを知り、自分たちの安全を守ってくれている人の苦勞を感じることもできた。札幌ゆきだるマンプロジェクトについても知り、グラウンドに耳つきの雪だるまを並べたり、川柳をつくったりしようという意欲へとつながった。また、雪に対するマイナスイメージを無くすために、雪のよさを探す活動を行っている。雪の「よさ」を調べていく中で、各グループはよさだけではなく「課題」があることにも気付いていく。例えば、高齢者の人たちが家の除雪に困っていることに気付き、「この問題をどのように解決しようとしているのか」などの問題意識をもち、調査を行った。その際に、「福祉除雪」という取組を知り、自分たちにできることはないかと考え高齢者体験セットを装着して除雪活動を行うなどして高齢者の立場で考えることができた。

地域における外部人材の積極的な活用による取組

専門家である、北海道教育大学の高橋庸哉先生をゲストティーチャーにお招きし、雪が生まれる秘密や、雲の動き、結晶の種類、雪質の種類などを教わる。子どもたちは、なぜ北海道にこれほど雪が降るのかを知り、結晶のおもしろさや、その神秘性に気付いたりしていく。さらに、札幌管区气象台の方をゲストティーチャーにお招きし、雪と天気予報、雪での事故について学び、自分たちの生活と雪を結び付けて考えるようになった。また、「雪育先生特別授業」として活動している、プロスキーヤーの児玉毅さん、井山敬介さん、DAIGOさんの3名に来校いただき特別授業を実施した。DVD、スライド、体験活動、クイズなどを通して、「雪の素晴らしさ」「スキーの魅力」について語っていただいた。

(2) 環境

エコスクール宣言

各園・学校が日常的に取り組んでいる節電・節水の取組やゴミ減量等の様々な活動、環境に関する学習の様子を「エコスクール宣言」として、すべての市立幼稚園・学校がまとめ、公表している。宣言した学校には玄関に貼付する「エコスクール宣言シート」が送付される。学校ホームページや教育委員会のホームページで公開される各学校の取組を情報共有することで、環境教育を進める参考にすることができ、子どもの環境への意識を高める上で効果的であった。

エコライフレポートへの取組

環境局から、夏・冬休み前に全児童・生徒分のエコライフレポートが配付される。学校で集約し環境局に送付すると、CO₂削減量を樹木の本数に換算され、手稲山口にあるエコライフの森に植樹され、各学校へは認定証が送付される。短時間で取り組めるように工夫されているため、各学級の長期休業前の学級活動などにおいて記入させ、長期休業中の目標として取り組ませることも有効であった。

栽培活動・農業体験

教材園や近郊の農家との連携で子どもたち自身の手で栽培活動を行うことも考えられる。栽培し、収穫する喜びや栽培がうまくいかない経験も、その主体として直接体験することが大切である。その際「学校給食フードリサイクル」について学んだり、学校で堆肥づくりを行ったり、収穫した野菜などを食したりすることは、環境教育ばかりでなく食育にもつながる。「また栽培したい」という気持ちをもたせることが、身近な自然に対する興味につながり、次の活動のきっかけにもなっている。

環境に関する学習

社会、理科、家庭科など、様々な教科の中で環境教育を行うことが可能である。「札幌市環境教育プログラム」や「札幌市総合的環境副教材」などを参考にしながら具体的な活動を年間指導計画に基づいて展開することが大切である。例えば、小学校6年理科「電気の利用」では、LED電球と豆電球を比較することで「有効利用」の考えと導く学習が、5年家庭科「寒い季節を快適に」では健康や環境に配慮した明るさや暖かさを意識する学習が可能である。中学校1年理科「身の回りの物質」からエネルギー環境問題を取り扱うことで、環境問題への意識を高めることができた。

エコ学校祭

各クラスにおいて、学校祭の準備を進める中でごみの排出量を減らし、さらに、廃材等を再利用しながらエコ学校祭につなげることができるか、「宣誓書」にサインをした上で、3R（Reduce・Reuse・Recycle）を意識して取り組んだ。

ごみ排出量調査

3日間の期間を設け、各クラスから排出されたごみ（資源ごみとペットボトル）の重量を測定し、係数を用いて年間排出されるCO₂の総量を計算した。その後、各クラスのごみ排出量を一覧として生徒会の担当生徒が作成し、他のクラスの排出量と比べることで、それぞれのクラスで、ごみの排出量を減らす取組について検討した。

清掃ボランティア

北海道市民環境ネットワークが主催する「ラブアース・クリーンアップ in 北海道 2017」に参加した。131名の生徒が参加し、学校近隣の歩道を中心に清掃活動に取り組んだ。

校種間の連携

環境をテーマにした校種間の連携は、高校と大学及び研究者など、学術的な連携の取組が見られた。外部講師（北海道大学 講師 保田修平 氏）により、水質調査活動による測定結果や一般的なデータから見てくる今後の自然環境の影響について解説をいただき、実際に、水質調査（「官能検査」「CODパックテスト」「硝酸態窒素」の測定）を行い、その後、各HRで測定結果と過去10年間の定点測定結果に基づき、水質の経年変化などを論議した。あるいは、環境教育講座として、北海道大学大学院の研究室（農学研究院・地球環境科学研究院・工学研究院・情報科学研究院・文学研究院・総合博物館・植物園の40講座）に赴き、研究室の先生や学生から指導を受け、実験や実習を行ったりしている。また、聖心女子学院では、生徒が調べたことを小学校や中学校を訪問して発表する授業を行っている。聖心女子学院の生徒が環境問題について作成したパワーポイントによる資料を見ながら学ぶ授業であった。ときおり、クイズも交えながら分かりやすく説明してくれた。

教科連携による取組

4年生理科では、光電池について学び、子どもたちは、「光があれば電気ができる」「乾電池と違って減らない」などと光電池のよさを実感することができた。次に、5年生社会科では、札幌ドーム見学を行い、札幌ドームの目的や施設の説明、働く人の様子を学ぶ他、環境への配慮についても学習する。特に節電については、LEDの照明や電光掲示板の採用、そして敷地内の太陽光パネル設置で、ドーム内の照明の一部として太陽光パネルで発電された電力が使われていることなど見学を通して学ぶことができた。また、国語の教材を使い江別市にある巴農場で、収穫を体験、機械を使った収穫を見学し、収穫後は、疑問について、農家の方が丁寧に答えてくださった。また、収穫した大豆を使った豆腐作りを行っている。また、総合的な学習の時間の中で、米についてテーマを考え、調べる活動、社会科「暮らしを支える食料生産」、「米づくりのさかんな地域」の学習として、新篠津村米林農園で田植え、稲刈り、脱穀体験。稲の成長を実感し、稲穂の取り出し方を体験。家庭科「ご飯とみそ汁をつくろう」の学習において収穫した米を炊飯した。このように各教科で環境を切り口にして他の教科と連携する取組もみられる。

地域における外部人材の積極的な活用による取組

地域における外部人材を活用し、より専門的な学習ができた事例が見られる。北海学園大学院非常勤講師の関口信一郎さんを迎えて、廣井勇の功績について学んだり、保護者で土木の仕事をしている掛作雅幸さんを迎えて、地質についての学習を行ったりした。

また、札幌市環境プラザ「環境教育リーダー制度」を活用して、派遣していただいた環境リーダーと一緒に、吉田川の生き物を観察した。子どもは、環境リーダーに見つけた生き物の名前や、その生態などについて質問して、教えてもらった。身近な公園の川が、多様な生き物の生息域であることや、生き物の名前を専門家から教わることは、子どもにとって環境に興味をもつきっかけとなった。

(3) 読書

効果的な一斉読書

朝の短い時間で取り組む一斉読書は、全校一斉で実施すること、教員も教室と一緒に読むことが有効である。一斉読書の取組を進める上で効果的なものとして、「寄託図書」の活用がある。同じ作者の本を取り寄せたり、テーマに沿った「セット図書」を利用して期間限定の学級文庫を設置したりすることで、作者やテーマに沿った読書への関心を喚起することができた。また、高学年が低学年に、高校生が小学生に読み聞かせをする目的をもち、そのための本を一斉読書で読んだり、実際に読み聞かせをしたりするなどの活動は、目的意識をもって一斉読書に取り組む上でも効果的であった。

教科等と関連付けた読書活動

教科等の学習と関連付けた読書活動の例としては、4年社会科「自然環境を生かすまち」で「北海道地誌」などの資料を活用した調べ学習を行ったり、6年理科「土地のつくりと変化」で寄託図書や学校図書館で化石に関する資料を探したりする学習活動を実施している。

また、国語の「読むこと」の学習では、作者の紹介文を書く目的をもって、同じ作者の作品を比べ読みすることにより関連読書へつなげることができた。このように、教科等の学習によって喚起された知的好奇心を効果的に読書につなげていくことが、生涯にわたる学びの基盤づくりに有効であった。

司書教諭と担任との連携

調べ学習では、単元の導入で児童生徒が各自のテーマを設定するタイミングや発展的な学習で調査活動に入る場面で、学級担任や教科担任と司書教諭が連携することが効果的であった。司書教諭が参考図書や新聞などの参考資料を紹介したり、テーマに関連した図書をあらかじめ選んでおいてブックトークで紹介したりすることによって、より効果的に教科等の学習と結び付けた読書活動が可能となった。年間の指導計画の中で、連携を図る単元をあらかじめ打ち合わせておくことにより、準備に時間をかけた効果的なレファレンス（本や文献についての問合せなどに答えること）につながった。

地域・保護者ボランティアとの協力

児童生徒の読書活動の活性化に欠かすことのできない存在が地域や保護者ボランティアである。例えば、一斉読書の時間に大型絵本の読み聞かせを行ったり、図書館担当者や図書委員会と協力して、学校図書館の環境整備や壁面装飾を行ったりするなど、個々のボランティアの個性や能力を活かした活動によって読書活動を一層活性化することができた。ボランティアが貸し出し業務を行うことで、放課後の学校図書館開館を行う学校も増える傾向が見られた。

校種間の連携

幼・保・小・中・高など校種間での連携を推進する取り組みも見られる。小学校教諭と幼児、児童と幼児などの交流を通して、幼児が楽しい読書活動に浸ることができるように

絵本や小学校 1 年生の教科書の読み聞かせを行っている。読み聞かせの前に幼児と小学校教諭が触れ合い小学校教諭に親しみの気持ちをもってから読み聞かせをしてもらったことで、幼児は小学校教諭を好きになり、その先生に読んでもらったお話も好きになって絵本の世界を楽しんでいた。小学校教諭に会うたびに親しみの気持ちも強くなり小学校教諭による絵本の読み聞かせにも引き込まれていった。また、職業体験として 6 年生が幼児に読み聞かせを行った。6 年生が事前に幼児が興味をもちそうな本を選んだり読む練習をしたりするなど、幼児のことを考えながら準備した気持ちが幼児にも伝わり、幼児は 6 年生に親しみの気持ちもち、絵本の世界を楽しむことができた。さらに、高校生による動物園のデジタル絵本などを読み聞かせを小学校の 3 年生に行うという取組がみられた。

教科連携による取組

読書を通じて様々な教科を連携させた取組も見られる。総合的な学習の時間及び道徳として、くすみ書房社長久住邦晴氏を講師に、「町の本屋の挑戦～本にはすべての答えがある～」の演題で講演会を実施した。講演前日には全校道徳として、書店経営者としての久住氏の実績を知り、講演への意識を一層高めるために、久住氏についてのドキュメンタリー番組を視聴させた。また、学校祭における取組特別活動として 2 年学年展示部門に「地域書店との連携コーナー」を設けた。ここでは、生徒が「朝の読書」で読んでいる本を写真に写し「私のおすすめの一冊紹介」と題した読書推進ポスターに貼付し展示した。このように連携した活動や学校だより等による地域や保護者への情報提供など、学校全体の取組を通して生徒たちに働きかけたことで、読書に親しもうとする態度の育成につながっていると考えられる。この他にも郷土料理に関する調べ学習の授業、植物に関する調べ学習の授業などとの連携や 6 年生の修学旅行では、キャリア教育の一つとして職人体験を行ったが、その事前学習では、自分が体験する職・職人について図書館の本を使って調べたりするなどの活用がなされている。

地域における外部人材の積極的な活用による取組

地域において活躍されている外部人材の活用の取組もみられている。全校読み聞かせの会では、夏休み中に図書館アドバイザーに来校していただき、廃棄本の基準を図書開放司書さんと確認することができた。地域の未就学親子に幼稚園を遊びの場として提供する『ポロップひろば』では、幼稚園で遊ぶだけでなく、子育てに役立つ情報提供の場としても活用していただけるように、子育て講座の開催にも取り組んでいる。札幌第一こどものとも社代表の藤田春義氏を講師に招き『親子で絵本を楽しもう』をテーマに、年齢に応じた絵本の選び方、親子での楽しみ方をお話ししていただいた。校内研修会において、「学校図書館を活用した授業の取組について」と題して、全国図書館協議会スーパーバイザーである佐藤敬子先生を迎え、「学び方の指導」に重点を置き、本の分類（NDC）、目次の活用の仕方などの研修を実施した。学び方の指導（情報教育）は全ての教科・領域はもとより、図書館内外で指導するなど、全校体制で計画的に実施していくことが重要であるという認識を共有することができた。

1-2 テーマ別事例の整理

ここでは、三つのテーマ別に、以下の四つの視点から実践事例について整理した。なお、資質・能力については、『平成30年度年札幌市学校教育の重点』における「札幌らしい特色ある学校教育」に示されている資質・能力に基づき、その成果と課題について整理した。

- A) 資質能力の育成
- B) 幼小中高の連携
- C) 教科連携
- D) 地域外部人材活用

(1) 雪

A) 資質能力の育成

■北国札幌らしさを学ぶ【雪】

札幌の大切な特色の一つであり、「札幌らしさ」を学ぶための貴重な財産である「雪」を通して、ふるさと札幌への思いを強め、雪に親しみ、雪と共生しようとする心を培う取組である。

*雪に親しみ共生しようとする心情や、ふるさと札幌への思い

*北国の季節や自然を生かした暮らしを追究できる知識及び技能や思考力、判断力 等

●「Let's 防風林冬タイム」～年間を通して見つめる防風林活動～

3年生生では総合「Let's 防風林タイム」として、冬期間の活動に「雪の学習」を位置付けている。森林管理署、道森林室と協定を結び、「とんきた夢の森」として、一部の管理を行った。冬期はスノーシューを履いて、防風林を散策する活動を行い、見たことと、感じたことを防風林辞典に掲載した。冬期は木にアクセスしやすく、幹の円周を計ったり、根元を掘って雪の下にいる虫や小動物を見付けたりする活動を行うことができた。

●「Let's 雪タイム」～雪を調べて、プレゼンテーション～活動～

雪について課題をもち、協働的に調査し発表する活動に「雪の学習」を位置付けた取組。各学級5～6チーム（5～6人構成）、全17チームがプレゼンテーションを行い、学年末懇談会では、保護者に向けて発表する。その後、互いに評価をして、上位チームが札幌市雪対策室主催の「雪と暮らすおはなし発表会」に参加した。学ぶカリキュラム・マネジメントを実施し、札幌市の特色ある教育の重点「雪」について実践している。

●体力向上実践「中休みのミニスキー」

本校では200足以上のプラスチックミニスキーがあり、これを休み時間に自由に利用できるようにしている。スキー山を開放しており、登ったり、滑ったり、転んだりしながら、冬の遊びに親しんだ。

●「ゆきあかりキャンドルロード」に参加

町内会の方から作り方を教えていただいた後、多くの子どもたちが参加しスノーキャンドルづくりを行った。子どもたちが作っている横で、地域の方もスノーキャンドルづくりを行い、お互いに声を掛け合って作るグループも見られた。キャンドルの灯りがゆらめくと、とても幻想的な雰囲気にも包まれた。多くの子どもたち、保護者、地域の方もたくさん訪れていた。

●札幌市雪対策室職員・区土木部職員による除雪に関する講演会

本格的な冬シーズンに入る前に、札幌市雪対策室と区の土木部の職員を招き、除雪に関する全校講演会を行った。札幌市の除雪に関する最新の情報を得るとともに、自然との関わりを考え、除雪に関わる人たちの苦勞の一端を知ることや社会の一員としての役割を果たすことをねらいとした。スライドやDVDの視覚に訴える資料に加え、実際に除雪に関わって苦勞している職員の声を聞くことで、除雪に対する考えが変わったという生徒も少なくなかった。

●図書館「雪に関する資料展示」

雪に関する学習を支援する活動として、学校図書館司書と生徒会図書局との協力により、雪に関する様々な種類の資料を展示・閲覧するコーナーが設けられた。全校講演会で学んだことを振り返ったり、これからの活動の事前学習をしたりと、有効に活用されていた。

●「雪かき・汗かきチャレンジ」への参加

生徒会が「雪かき・汗かきチャレンジ」への参加を呼びかけ、校内に手づくりのポスターを掲示して意識付けを図った。除雪という活動により高い目的意識をもって参加させることが大切であると考え、生徒から危険箇所等の情報を集めて1枚の地図にまとめた「除雪マップ」を生徒会が作成することとなった。地域に貢献することを目的とした活動を目指した取組である。

●平昌オリンピック出場選手との交流

まちづくりセンターと協力して平昌オリンピック出場選手の応援活動を行った。全校生徒が応援メッセージを書いた色紙・応援旗の贈呈や壮行会、パブリックビューイングへの参加を通して、ウィンタースポーツに親しみ、札幌に誇りをもつとともに将来に夢を抱くことのできる生徒の育成につながることを期待した取組である。

B) 幼小中高の連携【雪】

■【各段階におけるねらい】

幼稚園：かまくら作りやそり遊びなど、雪に親しむ遊びを通じて、雪や冬を楽しもうとする心情を育みます。

小学校：冬の天気や北国の自然、除雪など人々の暮らし等に関する理解を深めます。また、スキー学習や雪を活用した遊び等を通して、雪に親しもうとする心情を育みます。

中学校：スキー等のウィンタースポーツに関する学習や地域での除雪ボランティア等への取組を通して、雪や冬に親しみ、自然と共生しようとする心情とともに、雪に関わる活動への実践力を育みます。

高等学校：除雪ボランティアやまちづくりセンターとの関わりなど、地域等と連携した取組を通して、冬期間の地域の問題のよりよい解決に向けた、思考力、判断力を育みます。

●幼+中 ～ 生徒会雪遊びボランティア活動

生徒会雪遊びボランティア活動本校生徒会執行部が「雪遊びボランティア」を全校から募り、幼稚園及び菊の里まちづくりネットワーク協議会と連携して、地域の小さな子どもたちと一緒に外で遊ぶ活動が伝統的に行われてきた。冬季休業中に幼稚園の園庭や園舎にて遊びの場を提供する「ポロップひろば」と白石区の子育てサロン「わくわくぽけっと」が共催した雪遊びに活動が広がり、地域の幼児やその保護者の方とともに、想定を上回り30名近い生徒が雪遊びを行った。

●小+高～雪像案、雪像模型の制作、テレビ会議による話し合い

雪像の図案は、「札幌らしい特色ある学校教育」の各テーマのマスコットキャラクターをデザインした生徒が作製した。また、雪像模型について、模型制作班の生徒が放課後等を利用して制作し、さっぽろ雪まつり実行委員会において、雪像模型を発表した。その後、雪像制作交流のため福井県の小学校とテレビ会議を行い、雪像のテーマや雪像制作、お互いの地域や学校の様子について話し合いを行った後、福井県の小学生30名、教員、保護者20名程が来て、一緒に雪像制作交流を行った。高校生が小学生を指導し仲良く作業し、夜には交流会を行って親睦を深めた。

●幼+小 ～ スノーキャンドルづくり～

1年生では生活科「冬を楽しもう」、2年生では「冬をもっと楽しもう」に「雪の学習」を位置付けている。低学年では毎年恒例の雪像を作る活動を行った。1、2年生共同でスノーキャンドルづくりを行ない、幼稚園や保育園の子どもたちとの交流も行っている。

●幼+小 ～ 2年生生活科「あっぱれスノーランド」

この活動では「相手意識」を育てる学習計画になっている。「自分たちよりも幼い保育園児たちが楽しめる雪遊びは何か?」「自分たちと同じことはできないよ」「けがをしたら困るから安全にしよう」などと、2年生ながらに考えて計画する姿が見られた。

●幼+小 ～ スノーキャンドル・カバー・ポスター制作

児童を半数に分け、幼稚園と区の保育子育て支援センター（ちあふる）の園児と制作。事前に6年児童のみでスノーキャンドルの制作練習を行った。バケツへの雪の詰め方、抜き方などにコツが必要なが分かった。同時に、園児へ作り方を教える際の関わり方も見えてきた。児童の意欲が徐々に高まる。制作当日へ向け、キャンドルカバーに使うペットボトル集め、ポスターの原版作成などを行う。当日、園児達と楽しく交流が出来た。4月にお世話した1年生よりも幼いが、よく面倒を見ていたように思う。教えて、やらせてあげて、直してあげるなど、立派なお兄さん、お姉さんぶりであった。

●幼+小 ～ スノーキャンドル点灯式

ちあふる、国道沿い歩道、近隣の病院、幼稚園にスノーキャンドルを搬入した。点灯式は、暗くならないとキャンドルが映えないため、各所ごとに行った。一緒に出来なくて、やや寂しい気もするが、6年児童は自校での点灯式の帰り道、ちあふるや幼稚園に寄り、自分たちが関わったキャンドルの成功を確かめ、満足していたようであった。この学習が契機となり、いつか子どもたちが、自分たちの手でさらに本格的な地域の風物詩を生み出すようになってくれることを期待したい。風もなく穏やかな中で行われた点灯式。児童や園児が心を込めて制作したキャンドル。その明かりがゆらゆらと揺れる風景は、道行く人の足を止めるに十分な美しさであった。

●小+中 ～ スキーリサイクル事業について

スキーやウェア等の購入に伴う保護者の負担軽減を図ることやスキー用具の有効活用を図ることを目的とし、保護者や地域の方々の協力の下、PTAによるスキーリサイクル事業を実施している。中学校に入学する前に、小学校においてスキー授業のガイダンスを行っておくこととし、スムーズな運営を心掛けた。

C)教科連携【雪】

●生活科+理科 ～3年「みんなでつくろう雪あかり村～雪の不思議大発見～」

生活科で取り組んだ雪を使った遊びの経験を土台として、雪の観察や調査活動を行い、雪への理解を深めることをねらった。雪の結晶の写真を見て不思議に思ったことや知っていることを話し合うことで興味・関心を高め、実際の雪の結晶を観察することで活動を深めていった。観察用のルーペとベルベットを貼った板が人数分用意されているので、全員が同じ条件で観察できた。

●社会+国語 4年「みんなでつくろう雪あかり村～雪と生きる～」

社会科の「雪とくらす」と関連付けて冬の暮らしについて調べ活動を行った。また、国語科の「わたしの研究レポート」と関連付けて、雪あかり村の雪像作りの様子を記録し、発表する活動を取り入れた。

●社会+生活科～「もっとなかよしまちたんけん」～ちいきへのおんがえし～

生活科では地域の公共施設を訪ね、施設の役割やそこで働く人たち、地域の方の楽しみなどを学んできた。また、日頃から安全・安心などで地域の方々にはお世話になっている。本単元の最後に「まちの人たちともっと仲よくなりたい」や、「まちのために自分が役立てることはないか」という意識が育ち、北区土木センターから「転倒防止の砂入りペットボトル」づくりの依頼を受け、麻生まちづくり協議会の方々の協力を得ながら10月には1,300本の「砂入りペットボトル」を作成することができた。降雪期となった時、自分たちが作成した「砂入りペットボトル」が学校の玄関前や、まちづくりセンター、ショッピングセンターに置かれて地域の方々に活用されている様子に「ぼくたちが作ったんだ!」と誇らしげに伝えている姿があり、2年生の大きな自信となった。

●社会+図工 ペットボトルづくりとの系統性

「ペットボトルづくり」との系統性を図るため、4年社会科では、地域の除排雪の管理監督を行っている北区土木部冬みち地域連携担当係長らに来校していただき、「札幌市の除排雪」というテーマで札幌市の除排雪システム、携わっているたくさんの人の努力や、費やされている多額の予算などについて動画を交えて説明していただいた。子どもからは「除雪の仕事をしている人は、いつ寝ていますか」や「排雪溝にたくさんの雪が入ると水が溢れませんか」など、多くの質問が寄せられ除排雪についての興味・関心を喚起することができた。

●社会+道徳 「よさ」から「課題」へ

5年生では雪に対するマイナスイメージを無くすために、雪のよさを探す活動を行った。雪の「よさ」を調べていく中で、各グループはよさだけではなく「課題」があることにも気付いていく。例えば、高齢者の人たちが家の除雪に困っていることに気付き、「この問題をどのように解決しようとしているのか」などの問題意識をもち、調査を行った。

「福祉除雪」という取組を知り、自分たちにできることはないかと考え高齢者体験セットを装着して除雪活動を行うなどして高齢者の立場で考えることができた。

最終的には雪に対する「よさ」や「課題」をまとめたプレゼンテーションを作成し、保護者の前で主張することができた。また、その中から選出されたチームが札幌市建設局雪対策室主催の「雪と暮らすおはなし発表会」に参加し、学習の成果を発表した。

●生活科＋図工 「冬をもっと楽しもう～イグルー作り～」

2年生は、1年生の生活科「ふゆをたのしもう」の学習で、保護者参加型授業「スノーフェスティバル」を行い、親子チューブリレーや雪だるま作りを楽しんだ。また、担任の指導のもと、屋根なしの「イグルー」を作った。今年度は、それらの活動の経験を活かし、更に発展させた取組として、札幌市環境教育リーダーの派遣をお願いし、「イグルー作り」を行った。まず、事前に絵本『雪の結晶ノート』の読み聞かせを行った。そして、雪に対する興味・関心を膨らませた児童にイグルーを作ることを伝えた。

●体育＋生活 冬期間の外遊び

これまでは、冬期間なかなか外遊びにいかない子が多い状況が見られていた。今回、ボブスレーを購入したことにより、休み時間に元気にそり滑りをする子も多くなり、子どもの外遊びが少し増えたことが成果としてあげられる。また、生活科の学習の延長として、購入したミニスコップを使いワンダーランドでの作業をする子も多かった。子どもにとっては、この70cm 前後のミニスコップが作業的に大変使いやすい様で、楽しみながら作業する姿が見られた。

●総合的な学習の時間＋国語 ～雪のある暮らしを支える努力にふれる

中央区土木センターに出前講座をお願いした。除排雪のしくみや問題点など、プレゼンやDVDを通してわかりやすくお話しいただいた。普段、登下校時に歩く通学路の歩道がどのように除雪されているか、またその作業が深夜早朝などに行われることを知り、自分たちの安全を守ってくれている人の苦勞を感じることができた。DVDは、札幌市の雪対策を分かりやすくアニメにしたもので、子どもたちも高い興味・関心をもって視聴した。また、札幌ゆきだるまプロジェクトについても知り、グラウンドに耳つきの雪だるまを並べたり、川柳をつくったりしようという意欲へとつながった。

●保健体育＋道徳 6年「奉仕活動」～雪かき汗かきチャレンジとの連動

6年生が特別活動の一環として、学校の玄関前の除雪や、学校前の通学路の除雪、地域のゴミステーション周りの除雪等地域への奉仕活動も含めた取組を計画し、札幌市教育委員会が推進する「雪かき汗かきチャレンジ」と連動しながら実施した。

D)地域外部人材活用【雪】

●もっと！雪のすがたをさぐる

専門家である、北海道教育大学の高橋庸哉先生をゲストティーチャーにお招きし、雪が生まれる秘密や、雲の動き、結晶の種類、雪質の種類などを教わる。子どもたちは、なぜ北海道にこれほど雪が降るのかを知り、結晶のおもしろさや、その神秘性に気付いたりしていく。さらに、札幌管区气象台の方をゲストティーチャーにお招きし、雪と天気予報、雪での事故について学び、自分たちの生活と雪を結び付けて考えるようになった。

●4～6年「雪育先生特別授業」

雪育先生授業キャラバンとして活動している、プロスキーヤーの児玉毅さん、井山敬介さん、DAIGOさんの3名に来校いただき特別授業を実施した。DVD、スライド、体験活動、クイズなどを通して、「雪の素晴らしさ」「スキーの魅力」について語っていただいた。

●4年社会科札幌市の除雪「除雪にたずさわる人 大成ロテックさん特別授業」

校区の除雪を担当している大成ロテックさんにきていただき、どのように除雪をしているのか、除雪作業員の一日、除雪作業に従事していて大変なこと、仕事の上での苦勞、作業中に気をつけていることなどについて説明していただき、札幌市の除雪に実際に携わっている人々がどんな努力で除雪事業に携わっているかを浮き彫りにできた。作業員の一日のサイクルや、苦勞などを聞いていく中から、除雪業者が大変な苦勞をしながら除雪を行っていることについて、子どもたちが実感を伴いながらとらえることができた。

●4年社会科札幌市の除雪「除雪車試乗体験会」

4年生を対象とした体験会を区の土木部、大成ロテックのご協力をいただき、今年度も開催することができた。今年度は、スケジュールの関係で、単元のまとめをする段階での体験会になってしまったが、学習した内容を自分の目で見て、体験することで、子どもの興味関心が一層広がるような体験会になった。

●「歩くスキー出前授業」

札幌市観光文化局スポーツ部主催のクロスカンリースキーインストラクターを講師とした「歩くスキー出前授業」を利用。この学習は、札幌市観光文化局スポーツ部主催のクロスカンリースキーインストラクターを講師とした「歩くスキー出前授業」を実施した。この指導により、多くの児童が、滑り降りるたびにコツをつかみ、すぐに上達した。終盤には、インストラクターがデモンストレーションを行い、クラシカル走法、フリー走法の違いを教えていただいた。体験学習の最後にはまとめとして、班対抗のレースを楽しんだ。中には、デモンストレーションで見たフリー走法を試す児童もおり、注目を浴びていた。

●「冬をもっと楽しもう～イグルー作り～」

札幌市環境教育リーダーの派遣をお願いし、「イグルー作り」を行った。まず、事前に絵本『雪の結晶ノート』の読み聞かせを行ない、雪に対する興味・関心を膨らませた児童にイグルーを作ることを伝えた。当日は、ゲストティーチャーとして8名の環境教育リーダー（札幌市環境プラザの事業）にお越しいただいた。イグルー作りの道具や手順、注意事項を説明いただいた後、リーダーの皆さんによる直径1.5mほどの小さなイグルー作りのデモンストレーションが行われた。グラウンドにはちょっとしたイグルーの町が出来上がった。雪がちらつく氷点下の中、子どもたちの満足気な笑顔が温かく輝いていた。

●スキー学習にインストラクター派遣

観光文化局スポーツ部で実施しているスキー学習支援事業のインストラクター派遣を受けて、指導者を増やして学習を継続させるとともに、少人数指導ができるよう取り組んでいる。

●スキー学習に地域・保護者ボランティアの活用

校区内在住のスキー指導員などにスキーボランティアとして協力要請をすることで、人員を確保して指導体制の充実を図った。スキー学習開始に当たり、事前にボランティアと日程調整をはじめ指導内容や留意事項について打合せを行い、1年生～6年生まで全学年の学習について協力をいただきました。

●「積雪資源ピオトープ」を視野にいれた新たな取組への発展

地区おやじの会には、毎年4月の入学式に向け、1年生の教室清掃や校舎正面の雪割作業を伝統的に行っていた。これまでは保護者のみの活動であったが、これに部活動を中心とした主体的な生徒の参加を呼び掛け、校舎正面の雪割作業により堆積した雪や氷を「積雪資源ピオトープ」周辺に堆積する活動に発展させる試みである。グラウンドに積もった雪や地域企業の社会貢献事業である「校地内排雪」により、重機でグラウンドに排雪された雪を、スコップで大型そりに乗せ、「積雪資源ピオトープ」付近に運ぶ作業である。冬期間の子どもたちの運動の機会となり、結果的にグラウンド使用ができる時期を早めることとなる。さらに、グラウンドから排雪された雪の融雪水がピオトープの湧水を防ぐことになり、水生生物生息の定着持続性が期待できる。

●保護者の保育参加～ぺんぎんクラブ

保護者に大好評な保育参加。家庭から持ち寄った卵パックやプリンカップに色水を流し込む氷作りは、簡単に楽しめる冬の遊びの定番である。今回はヨーヨー袋に水を入れて丸い氷作りに夢中になった。保護者が冬の自然の開放感の中で子どもと遊び、家庭とは違う表情を見せる子どもたちの遊びに入ると、子どもたちの成長をダイレクトに感じることができる。このように、家庭でも再現し、親子で札幌の冬を楽しむことにつながることを意識して取り組んできた。

(2)環境

A)資質能力の育成

■未来の札幌を見つめる

「環境首都・札幌」宣言に基づき「さっぽろ地球環境憲章」を制定した札幌の市民として、四季折々の美しい自然と豊かな文化を次世代に伝え、地球と札幌のよりよい環境を創造しようとする心を培います。

- *自らふるさと札幌の美しい自然や環境を守り育てようとする態度
- *環境の保全に配慮した望ましい働き掛けのできる技能や思考力、判断力 等

●植生調査

森林教室では、三笠緑地における保全活動区域の面積を、GPS を利用して調べる体験や、どんな植物がどれくらい生えているのかを1 mごとに調べる植生調査、周辺の山林内との植生の比較などを行った。北海道森林管理局石狩地域森林ふれあい推進センターの牧野自然再生指導官はじめ、4名の方々に教えていただき、生徒たちは足下の植物を踏まないように気を付けながら、真剣に実習に取り組んでいた。また、無意根山周辺植物群落保護林「緑の回廊観察会」～と題し、無意根山大蛇ヶ原の高層湿原や周辺の森林環境について、山登りをしながら観察学習を行った。北海道大学の春木雅寛先生や、石狩森林ふれあい推進センターの森林再生指導官の方々の解説で、無意根山の成り立ちや土壌のこと、標高が高くなっていくにつれ森林の様子が変化すること、貴重な高層湿原では普段目にする機会の少ない生物の観察や環境保全を学んだ。

●森林教室

奥定山溪の水源の森に、苗を植えに行った。これまで、種が大きく苗に育てやすかったミズナラやイタヤカエデ等を中心に植えてきたが、より多様性のある森づくりを目指し、現地で山取りした苗ダケカンバやケヤマハンノキ、ナナカマド等を学校で育て、カミネツコン式にして植栽した。しかし、多くの苗がカシワマイマイの食害を受けたことで、小さな苗にとっては山地の自然環境も厳しく、無事に成長できるものばかりではないことを生徒たちは実感していた。最後に、来年度の植栽用に、林道わきに芽を出してしまったトドマツの他、何種類かの苗を掘り取り、持ち帰った。森づくりは長い年月がかかり、年々の環境変動の中ですべてが順調にいくわけではないが、粘り強く活動を続けながら故郷の自然環境保全に寄与していくことの大切さを生徒たちに気付かせることができた。

●理科・社会合同フィールドワーク

羊ヶ丘にある森林総合研究所北海道支所を訪ねた。研究本館で牧野支所長から、北海道の森や研究内容のお話をいただいたあと、平川浩文先生の研究室を訪問、北海道の野生動物についてお話を聞いた。平川先生は「ダーウィンがきた」というテレビ番組に出演し、コウモリの研究紹介をされたこともあり、生徒の質問に対し、興味深いお話を下さった。屋上では、山野井 CO₂収支チーム長から、高さ 40mの観測装置を見ながら、樹木が

光合成でどれほどの CO₂を吸収しているかの研究結果や、地球温暖化との関わりなどを学んだ。

●清掃ボランティア

北海道市民環境ネットワークが主催する「ラブアース・クリーンアップ in 北海道」に参加した。多くの生徒が参加し、学校近隣の歩道を中心に清掃活動に取り組んだ。また、3日間の期間を設け、各クラスから排出されたごみ（資源ごみとペットボトル）の重量を測定し、係数を用いて年間排出される CO₂の総量を計算した。その後、各クラスのごみ排出量を一覧として生徒会の担当生徒が作成し、他のクラスの排出量と比べることで、それぞれのクラスで、ごみの排出量を減らす取組について検討した。

●環境教育講座

高校1年の生徒全員が北海道大学大学院の研究室（農学研究院・地球環境科学研究院・工学研究院・情報科学研究院・文学研究院・総合博物館・植物園の40講座）に赴き、5人で1グループとなり研究室の先生や学生から指導を受け、実験や実習を行った。後日、この内容をまとめ、外部講師（TEDxSapporo オーガナイザー 鈴木卓真氏）によるプレゼンテーション指導を受け、グループごとに発表し、各クラスから選抜された代表グループによりポスターセッション及び全体発表会を実施した。

●スイカづくり体験を通して地域への思いが生まれる

自分たちでスイカを育て6年生は、「スイカまつり」の時期に合わせて、大きく、生長したスイカを感動とともに収穫した。「スイカまつり」は、6年生が収穫したスイカを自分たちが切り分けて、5年生以下の子どもに振舞い、地域の特産物を味わうとともに、収穫の喜びを全校で分かち合う集会である。協力していただいた方にも、子どもの様子を見ていただいている。今年はスイカを約100個使用した。この活動を通して自然の恵みに感謝し作物を育てる喜びを味わった。

●エネルギーの「見える化システム」の活用

本システムは環境局が設置した、電気使用量が常にディスプレイに表示され、電気エネルギーの節約につなげることのできるものである。理科の授業において、本システムを活用した授業を行っているが日常的には1階玄関ホールのディスプレイで全校生徒がいつでも確認できるようになっている。太陽光パネルでの発電状況も監視できるため、生徒の意識を高めるために役立っている。さらに、関心を高めるために、全校生徒を対象に「環境クイズ」を実施している。これは、本システムや太陽光パネル発電状況監視のディスプレイを見ることで解答できる内容のものである。

B) 幼小中高の連携【環境】

■【各段階におけるねらい】

幼稚園：遊び等を通して、資源やものを大切に使う態度を養います。また、身近な動植物に親しみをもって接する機会を通して、命の大切さに気付くようにします。

小学校：節電や節水などのエコ活動や飼育・栽培活動、身の回りの自然環境の保全等の取組を通して、児童一人一人に自らふるさと札幌の美しい自然・環境を守り育てようとする態度を育みます。

中学校：教科等の学習と関連した、身近なエコ活動や環境保全などの取組を通して、人々の生活や活動と環境との関わりについての理解と認識を深め、自ら地域に働き掛けようとする態度を育みます。

高等学校：地域等におけるエコ活動の取組や、地域の環境保全などについての探究的な学びを通して、環境の保全に配慮した望ましい働き掛けに向けた思考力、判断力を育みます。

●高校×大学～大学や近隣の人材を活用した活動

外部講師（北海道大学 講師 保田修平 氏）により、本校の水質調査活動による測定結果や一般的なデータから見えてくる今後の自然環境の影響について解説をいただいた。後半は、水質調査（「官能検査」「COD パックテスト」「硝酸態窒素」の測定）を行った。（調査する川の水は、教員や文化環境常任委員の生徒が、本校周辺を含め豊平川の支流から採取した。）その後、各HRで測定結果と過去10年間の定点測定結果に基づき、水質の経年変化などを論議した。その結果、水質に大きな変化がなく本校周辺を含め南区における豊平川の支流は、人や生物が生息するには適した水質環境であることが確認できた。

●高校×大学～環境教育講座 第1学年

第1学年の生徒全員（320名）が北海道大学大学院の研究室（農学研究院・地球環境科学研究院・工学研究院・情報科学研究院・文学研究院・総合博物館・植物園の40講座）に赴き、5人で1グループとなり研究室の先生や学生から指導を受け、実験や実習を行った。後日、この内容をまとめ、外部講師（TEDxSapporo オーガナイザー 鈴木卓真 氏）によるプレゼンテーション指導を受け、グループごとに発表し、各クラスから選抜された代表グループによりポスターセッション及び全体発表会を実施した。

●高校×研究者 サケ科学館講座 第3学年

第3学年の生物を選択した生徒が、近隣のサケ科学館へ赴き、研究者による指導を受け、サケの解体を体験し生態を学んだ。

●高校×小学校×中学校 環境問題について学ぼうより

聖心女子学院の生徒によるプレゼンテーション。聖心女子学院では、生徒が調べたことを小学校や中学校を訪問して発表する授業を行っている。今回は、聖心女子学院の生徒が環境問題について作成したパワーポイントによる資料を見ながら学ぶ授業であった。ときおり、クイズも交えながら分かりやすく説明してくれた。

●高校×研究者 治水・利水について

治水・利水について藤女子大学から講師をお招きし、講演会を実施した。

●高校×大学・研究者 環境教育講座 1年

北海道大学農学研究院・工学研究院・文学研究院・地球環境科学研究院・情報科学研究科・総合博物館・附属植物園、札幌市立大学デザイン研究科の協力を得て大学で講義を受け、実験・実習。大学生ティーチング・アシスタント（TA）の協力のもと、班ごとにプレゼンテーションを作成。

C)教科連携【環境】

●理科×総合的な学習の時間

4年理科「電気のはたらき」の学習の内容や時間配分を次のように工夫し、効果的に太陽光パネルを活用した。光電池を使ったものづくりの学習では、光電池の学習とつなげ、校舎に設置されている太陽光パネルを実際に見て、設置されている条件（太陽との角度、方向、金額等）から「どうしてこんなに金額が高いのに、たくさんのパネルを取り付けるのだろう。」という問題をつくった。子どもは、問題を解決するため、パナソニックの出前授業を通じて、太陽光パネルの仕組み、省エネ、設置した人の思いや願いを学んだ。

●総合的な学習の時間×エコライフレポートの活用

夏休みと冬休みには、エコライフレポートを活用して、これまでの学びを発揮し理解の質を高めた。子どもは、エコライフレポートの取組を通して、未来へ向けて自分のできることを見付けることができた。エコライフレポートに宣言した自分の環境行動に対しての日常化を図り、行動化への意欲を高めた。4年生総合的な学習の時間「エコライフ」では、エコを考えた生活について調べることを通して、自分の生活を振り返り、自分のできることを考えた。総合的な学習の時間で扱う抽象的な事象に理科の学習で具体的な事象を重ね合わせて学習を進めることで、「未来へ向けて行動を変える」ことで、子どもの知識の理解の質を上げることをねらいとした。

●理科×社会「電気のはたらき」と「私たちの生活と工業生産」

4年生理科「電気のはたらき」では、光電池について学んだ。子どもたちは、「光があれば電気ができる」「乾電池と違って減らない」などと光電池のよさを実感することができた。また、5年生社会科「私たちの生活と工業生産」では、札幌ドーム見学を行っている。そこでは、札幌ドームの目的や施設の説明、働く人の様子を学ぶ他、環境への配慮についても学習する。特に節電については、LEDの照明や電光掲示板の採用、そして敷地内の太陽光パネル設置で、ドーム内の照明の一部として太陽光パネルで発電された電力が使われていることなど見学を通して学ぶことができた。

●図工×保健体育科～「環境問題啓発ポスター」

環境と自分との関わりについて考えを深めるために、2学年（中学）の保健体育科で、様々な環境問題について調べ、啓発ポスターを作製した。他学年の廊下や階段に掲示されることによって、多くの生徒が日常的にポスターを目にすることができ、学校全体でそれを意識することが出来た。

●道徳×理科 ソーラーパネル（太陽光発電）の特色やよさを学ぶ授業実践

2年道徳「学校のひみつきち」は、学校のお気に入りの場所を紹介する活動を通して、学校のよさを再認識し、学校への愛着を深める学習である。子どもたちは、お気に入りの場所として、体育館・図書館など、休み時間によく利用する場所について発表するが、教師がソーラーパネルの写真を提示することによって、「屋上で見てみたい！」「なぜソーラーパネルがあるの？」と興味を示すようになった。そこで、実際に屋上に上がって、大き

なソーラーパネルを間近に見ることにした。その後、玄関ホールの発電モニターを見せながら、教師が太陽光発電の仕組みを簡単に説明した。

●理科×社会科×技術・家庭科×保健体育科×国語科×英語科

職員会議等で本校の環境教育とはどうあるべきか、環境教育のねらい、どのような生徒を育てたいのかを議論した。その結果、教科や特別活動による学習を中心に次のような内容を本校の環境教育と定義した。Ⅰ；「環境」とは何かについて、Ⅱ；「自然環境」そのものについて、Ⅲ；「環境問題」にはどのようなものがあるのか、Ⅳ；「環境問題」と人間生活の関わりについて、Ⅴ；「環境保全」に関する活動にはどのようなものがあるのか、Ⅵ；「環境保全」に関する新しい技術はどのようなものがあるのか等の学習。具体的には、理科、社会科、技術・家庭科を中心に環境問題や太陽光パネル、再生可能自然エネルギーの活用などについての授業が行われた。また、保健体育科、国語科、英語科においても環境問題、エネルギー問題を題材に実践が行われ、いろいろな教科での学習が模索された。

●化学基礎×物理×学校設定科目～実験を通して学ぶ太陽光パネルの仕組み

実際に、LED に強い光を浴びせると微弱の電流が流れ、その関係性を実験で確認することができる。この LED を用いた実験などを通して、太陽光パネルの発電について体験的に理解を深めた。本取組は、化学基礎、物理、学校設定科目などの授業時間に実施された。これらの科目の既習事項と関連付ける形で、太陽光パネルの仕組みについて学んだ。

●美術×情報 タブレット PC を用いたポスター制作

タブレット PC (OS:Android) を用いての、太陽光パネルの紹介ポスターを作成した。本校生徒のスマートフォンの利用率は高く、タブレット PC の基本的な操作方法を既に知っている生徒がほとんどである。そのため、使い慣れたデバイスを用いることで、生徒が主体的にポスター制作を行うことができる。

●保護者への情報発信と保護者からの評価

札幌市の太陽光発電設備の活用例の1つとして、太陽光パネルの普及啓発を行うために、保護者に説明し、保護者の環境意識の向上を促すことが示されている。『学校だより』を通して、同設備の特色と本校の環境教育について保護者に周知している。「保護者アンケート」には、雪・環境・読書にかかわる教育活動や学校の特色を活かした教育活動への評価項目があり、肯定的な評価が約 90%となっている。本校の環境教育の実践を保護者に理解していただいている表れとして受けとめている。

●国語×総合的な学習の時間 農業体験

国語「すがたをかえる大豆」の学習と江別市にある巴農場で、収穫を体験、機械を使った収穫も見学。収穫後は、疑問について、農家の方が丁寧に答えてくださった。また、収穫した大豆を使った豆腐作りを行った。

●総合的な学習の時間×社会×家庭科 農業体験

総合的な学習の時間の中で、米についてテーマを考え、調べる活動を行った。また、社会科「暮らしを支える食料生産」、「米づくりのさかんな地域」の学習として、新篠津村米林農園で田植え、稲刈り、脱穀体験。稲の成長を実感し、稲穂の取り出し方を体験。家庭科「ご飯とみそ汁をつくろう」の学習において収穫した米を炊飯した。

D)地域外部人材活用【環境】

●エネルギーの今とこれから（日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会（NACS）による出前講座）

暮らしのモデルケースを基に、「エネルギー消費の場面」や「エネルギー消費量の増加」についてグループで討議し、暮らしの中のエネルギーを学んだ。その後、化石燃料と自然エネルギーの課題について既習の知識を基に議論を行った。実践のまとめとして、これからどのように環境・エネルギー問題に取り組むかを考え、各個人が今後の決意表明を行った。

●地球温暖化防止活動委員

理科の学習で光電池の有用性について学んだ子どもは、次に学校に設置されてあるソーラーパネルに着目した。「ソーラーパネルはどのような働きをしているか」「どんな仕組みか」「なぜ、太陽光発電をするのか」など、気になったことをインターネットや学校図書館の資料で調べた。しかし、小学生にとって専門的な言葉や社会的背景を捉えるのは難しい。そこで、ゲストティーチャーとして地球温暖化防止活動委員の奥谷さんを招き、太陽光発電や環境に対する100個以上に渡る質問について専門的な知識をかみ砕いて説明していただいた。

●農業体験リーダーの宮本さん・長島さん

子どもは、農業体験リーダーの宮本さん・長島さんに、よく育つ土づくりを教えていただいた。自分になじみ深い食材である米、大豆（枝豆）を中心とし、さつまいもやいんげんの栽培も教材園で行った。4種類の農作物に関わって、生育の観察や水の管理、雑草抜きを継続的に行い、折々で指導を仰ぎながら栽培に役立てた。宮本さんに学校の畑の作物の収穫の仕方を教えてもらいながら、4種類の作物の収穫を行った。

●「廣井勇」出前授業

北海学園大学院非常勤講師の関口信一郎さんを迎えて、廣井勇の功績について学んだ。関口さんは、廣井勇に関する本を出版し、前PTA会長の紹介で授業を引き受けていただいた。小樽南防波堤の模型を使って分かりやすく説明していただき、専門的な学習ができた。また、子どもは、先人の功績と努力を学ぶことで、ふるさと北海道への愛着を深めることができた。

●「地質」出前授業

本校の保護者で土木の仕事をしている掛作雅幸さんを迎えて、地質についての学習を行った。子どもは、映像を使った説明や実際にボーリング調査で出てきた地層のサンプルなどを見せていただき、校舎の下の地層の様子を知ることができた。その中で、苗穂地区が豊平川扇状地の先端に位置し、湧き水が出ることやそれを利用した工場（メグミルク、サッポロビール、福山醸造）があることも興味深く学んだ。この学習を通して、苗穂の歴史の一端にも触れ、郷土への愛着をもつことができた。

●環境教育リーダー 吉田川公園の達人と、川の生き物を探す

札幌市環境プラザ「環境教育リーダー制度」を活用して、派遣していただいた環境リーダーと一緒に、吉田川の生き物を観察した。子どもは、環境リーダーに見付けた生き物の名前や、その生態などについて質問して、教えてもらった。身近な公園の川が、多様な生き物の生息域であることや、生き物の名前を専門家から教わることは、子どもにとって環境に興味をもつきっかけとなった。吉田川探検の後、吉田川ポスター作りを行った。ポスター作りが、子どもの主体的・対話的で深い学びとなるには、活動で得たことを働かせてポスター作りを行うことが重要である。環境リーダーが吉田川探検の後に、一緒にまとめや質問を行えるようにしてくださった。

●外部人材の活用を校内での学びにつなげる～体験活動を通じて感じたことを生かす

米の収穫時期に合わせて、地域にある、NPO 法人「あそベンチャースクール」と連携し、外部講師を招いて羽釜体験を行った。例年、自分たちで薪を割り、火をおこして炊飯をする活動を行っているが、今年度は、雨天であったため、家庭科室での羽釜体験を行った。それでも、羽釜を初めて見る子どもにとっては、昔話の挿絵や歴史の資料でしか見たことのない羽釜を実際に使う貴重な機会となった。講師の先生から、火加減についての説明を真剣に聞きながら、「まだ蓋を開けてはいけないんだよ。」など、炊飯を楽しむ様子が見られた。炊けたご飯は、学年全員で、家庭科室で美味しく食べた。

●バイオミメティクス～ 生物から学ぶテクノロジー

自然界の生物には、その環境に適応するための体の特徴が見られる。その生物の持つ特徴を人間の生活に応用する技術をバイオミメティクス（生物模倣）と呼ぶ。この研究について北海道大学総合博物館の大原昌宏教授から話を伺った。近年、産業の発展に伴って発生する温室効果ガスと地球温暖化について北海道大学の関幸准教授の話を伺った。過去数千年の地球の平均気温推移データの分析結果を照会し、現在、地球温暖化が進行していることは間違いないが、その変化量が100年単位で1℃未満という小さな変動であることから、生徒は、多くの人あまり危機感を感じていないことや、次の世代が幸福に暮らすために温暖化を食い止める必要性を学んだ。

●雪氷に関する科学～ 札幌の雪を通して～

雪の結晶のでき方や極地方の気象について北海道教育大学の尾関俊浩教授から話を伺った。雪の結晶は六角形を基本とし、その形状は上空の気温と湿度によって異なる。その研究を行なった中谷宇吉郎博士の話や雪の結晶観測方法の工夫について興味深い話を伺った。さらに、南極越冬隊での経験談をペンギンやオーロラなどの動画とともに説明を伺うことができた。

●企業の環境保全分野と連携した体験的環境学習

札幌市学校給食フードリサイクル堆肥の教材化と「学校畑」の作物栽培実習体験的で課題探究的な【環境】に関する更なる教育的アプローチを目指し、「さっぽろ環境賞受賞」の「北海道グリーンビズ認定企業」と連携を行った。「学校畑」は、生徒により一般教室の窓

下に造成・代々継承され、札幌市学校給食フードリサイクル堆肥を活用した土づくり、作物から得られる豊富なデータからの科学的検証、物質循環の体験的な概念形成等、科学に基づいた本校の環境教育の場である。食の安全と自然環境に配慮した有機 JIS 肥料の製造技術にも詳しい企業の専門家（環境プランナー・環境再生医）をゲストティーチャーとして、中学3年理科・環境分野で授業を実践した。

●ピオトープ湿地における水辺学習

隣接して流れる望月寒川のかつての氾濫原に位置し、ピオトープは水がたまりやすい環境特性を利用して造成した。地域企業の土木工事技術部門が重機を導入して拡大採掘してくださり、湿地環境が充実し、理科（生物・環境水質調査）教材として活用性が高まった。本活動と科学研究としての成果は本校科学部が内外にむけて発表し、紹介された。

●企業の社会貢献事業との連携

地域企業の大型重機で年間数回にわたり積み上げられ、大きな雪山ができる。生徒は雪山をスコップで崩し、大型そりに乗せて「積雪資源ピオトープ」まで運ぶ。体育文化振興会グラウンド排雪活動は、全校生徒に呼びかけ、降り積もったグラウンドの雪を「積雪資源ピオトープ」に運ぶ雪かき活動である。運動系部活動の冬期間のトレーニングとなり、文化系部活動や部活動に入っていない生徒の運動の機会であり、結果的に春のグラウンドを早く使えることにもなる。3学期に4～5回実施し、のべ250名以上の生徒が参加する。地域企業の社会貢献事業と併せ、グラウンドから運ばれて積み上げられてできる大きな雪山からは、ピオトープの水位を維持する融雪水がもたらされる。春に水鳥が訪れ、地域特有の希少魚種であるイバラトミヨを含めた水生生物生息の定着持続性が高まる。

●大学や近隣の人材を活用した活動

外部講師（北海道大学 講師 保田修平 氏）により、本校の水質調査活動による測定結果や一般的なデータから見えてくる今後の自然環境の影響について解説をいただいた。

後半は、水質調査（「官能検査」「COD パックテスト」「硝酸態窒素」の測定）を行った。（調査する川の水は、教員や文化環境常任委員の生徒が、本校周辺を含め豊平川の支流から採取した。）その後、各HRで測定結果と過去10年間の定点測定結果に基づき、水質の経年変化などを論議した。その結果、水質に大きな変化がなく本校周辺を含め南区における豊平川の支流は、人や生物が生息するには適した水質環境であることが確認できた。

●地域の洋菓子店とのコラボレーション

自分たちで育てた野菜を食材に校区にある洋菓子店では、子どもが育てたカボチャを食材に利用して商品を提供している。この洋菓子店は、地元産にもこだわり、道産の材料を用いている。5年前から子どもの育てたカボチャ、サツマイモ、ジャガイモなどを提供し、さまざまな商品を製造していただいている。今年は、商品となったカボチャプリンやパウンドケーキなどを持ってきてくださり、子どもは商品になるまでの話を聞かせていただきながら、その喜びを実感していた。

(3) 読書

A) 資質能力の育成

■生涯にわたる学びの基盤【読書】

「読書」により言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かにするとともに、「知的好奇心」をふくらませ、一生涯にわたり学び続けようとする心を培います。

- *楽しみながら幅広く読書しようとする意欲
- *ものの見方や考え方を広げ自己を向上させようとする態度
- *内容を適切に読む力や情報を活用する力 等

●デジタル絵本による国際交流

ポートランドのリッチモンド小学校、マウントテーバー中学校、グラント高校のリクエストで15冊のデジタル絵本と6冊の教材を制作し、グラント高校の生徒が夏期研修に来ている7月に発表会を行った。また、グラント高校とスカイプで交流会を行った。デジタル絵本と教材は、本校のWebページより閲覧、タブレットへダウンロードできるようにした。

●「ブックさあくる」の活用

市立図書館の蔵書を使うことで、読書の幅が広がることを考えて活用することにした。実際に寄託図書では、種類が限定されていたり、貸出しが重なっていたりすることもあるため、市内全図書館の蔵書が利用できるブックさあくるはとても利用価値が高い。

借用期間も2週間あり、「読書チャレンジ週間」に合わせて借りられることも本校の活動に合致した。

●「家読（うちどく）」の取組

家族で同じ時間に本を読み回し、家族で本についての話をするといったルールのもと事前に家庭に紹介し、「家読カード」を用いて家庭の反応を調査した。「うちの子がこんなに難しい本まで読めるようになっていたとは知らなかった。こんなに内容を理解できているなんて、我が子について改めて発見させられた。」「今までは何気なくテレビを付けっぱなしにしていることが多かったことに改めて気が付いた。娘にせがまれて始めたが、少し続けてみようと思う。」などの意見が寄せられた。家庭での多くの時間をゲームやテレビに費やすことになりがちな今の子どもたちに、家庭で同じ時間に一緒に本を読むことで豊かな時間が流れた。

●全校一斉朝読書

生徒は毎朝8時30分までに登校し、8時35分～8時45分の10分間、各自で用意した本を読む。漫画・絵本・教科書等は不可で、宿題や予習はしない約束である。全員が集中して取り組んでおり、私語等は皆無である。

●推薦図書紹介・図書館オリエンテーション

図書館発行の新刊ナビ「悠遊読徳」で新刊リストや「先生のおススメ」を紹介し、図書館発行の「本ナビ」で局員が内容紹介をするほか、玄関に設置した情報スクリーンにより推薦本の紹介をしている。また1学年の国語の授業で図書館オリエンテーションを実施して、司書が図書館利用とメディアリテラシーについて指導している。また、生徒ホールに今回の事業で貸与された書籍を設置して、貸出を簡略化するとともに、生徒が気軽に本に触れる環境を作っている。

●キャラクター教材アニメの制作

豊かな心を育むアニメーション教材の続編「ゆっぼろ・ちっきゅん・おっほんの気持ちの良い図書館」を札幌市教育委員会の依頼で2年生の情報メディアデザインの選択生徒達が制作した。このアニメーション教材は、図書館の係活動を通して、図書館利用者にどのように気持ち良く図書館を利用してもらえるかを子供たちに考えてもらう内容となっている。

●ユネスコ未来遺産運動の活動

日本ユネスコ協会連盟の「私のまちのたからもの」コンテストにおいて、スライドショー作品「ニシンのまちに受け継がれてきたもの」がグランプリの日本ユネスコ協会連盟賞を受賞した。題材は、小樽祝津のニシン番屋で行われた食育イベントであった。取材した写真をまとめ、電子書籍の写真集「私のまちのたからもの小樽祝津週末食育番屋」を編集し、札幌市電子図書館よりリリースした。この活動は、ユネスコスクールの ESD 優良実践事例に採択された。

●学校図書館での札幌市電子図書館活用授業

札幌市電子図書館では、広報さっぽろのバックナンバーが電子図書化されている。授業を行うにあたって生徒が札幌市図書館の貸出券を発行してもらい、図書館にタブレット端末を設置して授業を行った。札幌市の子育てサービスについて、グループごとに広報さっぽろのバックナンバーを活用して、どんなサービスがあれば子育てする際に助かるか調べ、発表を行った。また、札幌市電子図書館には、デジタル絵本のライブラリーが多数ある。中でも「おばけのマール」は、三岸好太郎美術館や青少年科学館の絵本があることから、北海道博物館のデジタル絵本のストーリーやページ構成の参考にし、アイデアスケッチの際に図書館で閲覧し、活用する授業を行った。

●図書館を活用したヤングアダルト選書ポスター展

授業で生徒が推薦する図書を図書館にあるものの様々なジャンルから推薦図書を選び、タイトルが重複しないように推薦図書を決定した。ポスターにするための素材を準備して、パソコンソフトを活用して、B2サイズのポスターを制作した。あらすじの紹介だけでなく、他の生徒に興味を持ってもらえるようなキャッチコピーやイラストを工夫し、カラープリンターで制作した。完成したポスターは、図書館前の廊下に掲示して、全校生徒に見てもらえるようにした。ポスターにすることにより、図書館報よりも多くの書籍情報を提

供できる上、キャッチコピーやイラストを工夫することにより本の内容をより分かりやすく伝えることができ、他の生徒にも興味を持ってもらい、生徒の図書館の利用を促進することができた。

●円山動物園の環境デジタル絵本制作と読み聞かせ

円山動物園の協力を得て、円山動物園の動物をモチーフとした創作デジタル絵本を制作した。5月に動物園で取材を行い、夏休み前までに絵コンテを制作し、動物園の飼育員の添削を受け、10月中旬に完成し、さっぽろ絵本グランプリに応募した。

●幼児が絵本の世界を楽しむための園生活づくり

幼児教育センター絵本ネットワークセンター事業で、毎週貸出される大型絵本を利用して幼児への絵本の読み聞かせを行った。絵本が大きいので、幼児は絵の細部までよく見たり、絵のイメージの世界に引き込まれたりして、絵本の世界を楽しみ、その楽しさを友達と共有することもできた。

●小学校と幼稚園の交流と読書活動

保護者向けの子育てに関する情報交流の場である『わいわいトーク』において絵本をテーマに交流を図り、『どんな絵本がいいのか』『各家庭でのアイディア』など保護者同士で気軽に話し合った。また、絵本便りや学級便り、および学級懇談会などで人気の絵本やお勧めの絵本を掲載し、家庭でも絵本への関心を高めていけるよう努めた。

●朝読書推薦書籍ポスター展

各学年の朝読書の推薦図書のパスター展を図書室前の廊下で行った。図書館にある書籍を自由に生徒が選び、そのポスターを制作し、生徒に広報する活動はポスターを制作する生徒も、見る生徒にも好評で図書館を利用するきっかけとなっていると思う。また、今後は小学生へ推薦図書ポスターを制作して児童館や小学校の図書室へ掲示するなどの展開も考えられる。

●「指令書」を活用した図書館利用

中央図書館のたくさんの蔵書に触れながら、楽しく本を探し出す活動ができるよう、「指令書」を活用した。指令書に書かれたヒントをもとに、その内容が書かれた本を1人1冊選び、選んだ本をグループ内で読み合い、一番よいと思った本の奥付を記録する。本の奥付にも着目させることによって、「どんな人が作ったのか」「いつごろ制作されたのか」「何度も改訂されているのか」「追加注文の入る人気の本なのか」といった、異なる視点から本の面白さを発見できるようワークシートを作成した。指令を受け取った後、事前に配付された館内地図を見てすぐに目的の書架を見つけたり、十進分類法の一覧を見て、目指す書架の見通しを立ててから移動したりなど、配架の工夫について学んだことを生かして活動していた。

B) 幼小中高の連携【読書】

■【各段階におけるねらい】

幼稚園：絵本の読み聞かせなどを通して、お話の世界の楽しさに触れ、読み聞かせなどを楽しもうとする態度を育みます。

小学校：朝読書や教科等の学習と関連させた読書などを通して、楽しみながら幅広く読書をしようとする意欲を育みます。

中学校：朝読書や教科等での調べ学習などの活動を通して、多様な本に触れるとともに、内容を適切に読む力や情報を活用する力を育みます。

高等学校：教科等での調べ学習などの活動を通して、生涯にわたって読書に親しみ、ものの見方や考え方を広げ自己を向上させようとする態度を育みます。

●幼×小 総合的な学習の時間の読み聞かせ

学期に一度、「朝の読み聞かせタイム」を行っている。司書教諭、学校司書、図書館ボランティアが学級を訪問し、朝の読書の時間に10分間読み聞かせる。同時に、学校図書館にその時の読み聞かせに関連する図書のコーナーを作っている。3学年が保育園や幼稚園に訪問する際、必ず絵本の読み聞かせをすることにしている。それに先だって家庭科では幼児向けに読み聞かせる授業とテストが行われた。

●小×中×高 デジタル絵本による国際交流

ポートランドのリッチモンド小学校、マウントテーバー中学校、グラント高校のリクエストで15冊のデジタル絵本と6冊の教材を制作し、グラント高校の生徒が夏期研修に来ている7月に発表会を行った。また、11月8日にグラント高校とスカイプで交流会を行った。デジタル絵本と教材は、本校のWebページより閲覧、タブレットへダウンロードできるようにした。

●幼×小 小学校教諭による絵本や小学校1年生の教科書の読み聞かせ

小学校教諭と幼児、児童と幼児などの交流を通して、幼児が楽しい読書活動に浸ることができるようにする。小学校教諭による絵本や小学校1年生の教科書の読み聞かせを行った。読み聞かせの前に幼児と小学校教諭が触れ合い小学校教諭に親しみの気持ちをもってから読み聞かせをしてもらったことで、幼児は小学校教諭を好きになり、その先生に読んでもらったお話も好きになって絵本の世界を楽しんでいた。小学校教諭に会うたびに親しみの気持ちも強くなり小学校教諭による絵本の読み聞かせにも引き込まれていった。

●幼×小 小学校6年生による幼児への読み聞かせ

職業体験として6年生が幼児に読み聞かせを行った。6年生が事前に幼児が興味をもちそうな本を選んだり読む練習をしたりするなど、幼児のことを考えながら準備した気持ちが幼児にも伝わり、幼児は6年生に親しみの気持ちもち、絵本の世界を楽しむことができ

た。近隣の小学校と複数の幼稚園と連携し、読書活動の取組を情報交流し、成果の共有をした。各園で同じ幼児の姿があり、幼児が絵本の世界を楽しむための環境の構成の大切さを共有することができた。

●幼×保×小 幼保小が読書活動について情報交流をする取組

幼・保・小が互いの取組について知り合い、学びの連続性について考える。小学校が国語科の公開授業をした後、朝読書と国語科の読書活動の違いなどについての説明を聞いた。幼稚園（認定こども園）、保育園が公開保育を行い、絵本を題材にした活動を公開したり、各園の読書活動の取組について情報交流したりした。9月には札幌国際大学付属幼稚園が中心となり『読み聞かせ、ブックトークの魅力』をテーマに講演会を開催した。

●幼×保×小 “なめらかな接続”と“こまやかな関わり”

幼・保、小の連携においては、“なめらかな接続”と“こまやかな関わり”がキーワードとして浮かび上がってきた。幼・保では“園児が活動にひたること”、小では“児童が集団でつながること”が重要である。そのためには、“園児と教諭・保育士が夢中になって感動し、共感すること”から、“児童と教諭が学び合って共有すること”への橋渡しを意識したネットワーク作りに向けて、関係機関が一体となって取り組んでいきたい。楽しい読書活動については、幼・保、小の方法や手段が違っていても、目指すところは同じである。そのことを踏まえながら、教諭や保育士自らが読書の魅力を感得しつつ、一人一人に関わり続け、「本を開いてみよう、読んでみよう」という気持ち・姿勢を大切にしたい。本の内容価値を問うのは、子どもたちの読書に対する気力・体力が整ってからの話である。幼児期の感覚的・体験的な学びをしっかりと体に染み込ませることが、小学校以降の言語的な学びにつながり、それらを支える活動の一つとして、読書活動がある。

●小×高 小学校ミニ児童会館での読み聞かせ

さっぽろ環境賞の新聞報道で小学校ミニ児童会館よりデジタル絵本の読み聞かせの依頼があった。3年生の生徒が放課後、児童会館を訪問し動物園のデジタル絵本と子供達のリクエストに応じて、電子図書館用に制作したデジタル絵本を何冊か読み聞かせを行った。ミニ児童会館での読み聞かせは、今後も何回か継続して行っていくことになったので、デジタル絵本の発表の場として活用していく他、生徒と小学生たちとの読書を通じての交流の場としていきたい。

●小×高 小学校でのデジタル絵本の読み聞かせ

完成した動物園のデジタル絵本など8冊を読み聞かせを小学校の3年生に行った。読み聞かせ後、絵や文章もすべて生徒の創作であることを説明すると小学生たちから驚きの声が上がった他、大型テレビに投影しながら読み聞かせを行ったので、3年生全員が視聴することができ、読書に対する興味関心が高まるとともに温暖化などの影響で絶滅の危機にある動物たちの存在を知ることができた。

●小×高 小学校でのデジタル絵本読み聞かせ

札幌市電子図書館で小学校低学年向けのデジタル絵本を7冊「神様の動物と悪魔の動物」、「マッチ売りの少女」、「欲張りの犬」、「煙草と悪魔」、「スズの兵隊」、「オオカミと7匹の子ヤギ」、「赤い靴」を出版した。小学校の3年生にデジタル絵本の読み聞かせを行った。札幌市電子図書館の独自資料のランキングで「欲張りの犬」が「おばけのマー」を抜いて1位になった他、残り6冊も11位までにランキングされた。

C)教科連携【読書】

●総合的な学習の学習×情報 職場体験に関する調べ学習の授業（2年総合的な学習の時間）

図書館とコンピュータ室を利用して職場体験の事前学習を行った。学校図書館司書が体験場所ごとの参考資料の一覧を全員に配付し、調べ学習を行った。また、本年度からコンピュータ室で職業調べサイトを使用し、最新の情報や自分の性格に合う職業など自己分析を行った。図書とホームページを両方活用することで、相互の情報を補完し合い職場体験の事前学習をより深めることができた。

●総合的な学習の時間×理科 調べ学習

小学校3年生の総合的な学習の時間『ときわの森はかせになろう』では、芸術の森の樹木を観察し、発見したことを図鑑にまとめる活動を設定した。見学後、「自分のお気に入りの樹は、何という名前なのかな。」「樹齢は、いくつくらいなのだろう。」など、疑問やさらに知りたい事柄が生まれ、図書室で調べ学習を行った。植物図鑑や理科に関する本を探し、調べ学習を進めていく中で、一人一人が課題を解決することができた。調べ学習後は、「自分たちの発見を、全校児童や地域の方に広めたい。」という思いから、図鑑にまとめ、その図鑑を図書室に飾らせてもらった。多くの人に見てもらえるという事実を伝えることで、高い意欲で学習を進めることができた。

●国語×図工 作品を読み深め、作品の価値を他に広める活動（ポップ作り）

5年生の「大造じいさんとがん」（椋鳩十）の単元では、図書館の椋氏の他の作品を選んで読んだ。椋氏の人間性を探り、考えを知ることでより作品に込められた思いを感じ、読み深める学習を行った。推薦文を書く活動（本を読んでその本の推薦文を書く）では、図書館の貸し出し記録から椋鳩十作品があまり読まれていないという実態をとらえた。椋作品にスポットを当て、他の人に自分が選んだ椋氏の本を読んでもらうために推薦文やポップを作るなどの活動を行った。今回は最初に、「大造じいさんとがん」のポップづくりを進めた。その後、図書館にある椋作品を活用し同じく、ポップ作りの活動を行い、他者に椋作品の価値を広める取り組みを行った。

●総合的な学習の時間×道徳×特別活動

総合的な学習の時間及び道徳として、くすみ書房社長久住邦晴氏を講師に、「町の本屋の挑戦～本にはすべての答えがある～」の演題で講演会を実施した。講演前日には全校道徳として、書店経営者としての久住氏の実績を知り、講演への意識を一層高めるために、久住氏についてのドキュメンタリー番組を視聴させた。また、学校祭における取組特別活動として2年学年展示部門に「地域書店との連携コーナー」を設けた。ここでは、生徒が「朝の読書」で読んでいる本を写真に写し「私のおすすめの一冊紹介」と題した読書推進ポスターに貼付し展示した。このように連携した活動や学校だより等による地域や保護者への情報提供など、学校全体の取組を通して生徒たちに働きかけたことで、読書に親しもうとする態度の育成につながっていると考えられる。

●家庭科×行事 行事1年「炊事遠足」

朝の全校一斉読書の時間に読んだ料理関係の雑誌やパンフレット、本などを参考にして炊事遠足の献立を作った。料理関係の本を読んで、デザートをどうするかの話合いができてよかった。行事ごとに関連する本を読むとためになっていいのではないか。という感想もあった。

●社会 図書館活用授業

「国名や国旗から世界を知ろう」という単元で、図書館を利用して調べ学習を行った。本校の蔵書だけでは足りず、寄託図書、ブックさあくるを活用し、さらに、本校学校図書館司書が勤務している簾舞中学校からも借用した。ガイダンスも兼ねて学校図書館司書がパスファインダーを作成し、調べ方や参考図書の使い方を説明してから学習を行ったが、初めての調べ学習ということもあり、学校図書館司書の支援を受けながらレポートを作成している生徒が多かった。

●技術・家庭科 郷土料理に関する調べ学習の授業（2年技術・家庭科6月実施）

「地域の食材と文化」「郷土料理」についての調べ学習を行った。郷土料理に関する資料はたくさんあったが、レシピまで記載されている資料が少なく、調べるのに苦労する生徒が多かった。レポートを個人でまとめた後、その中から実際に調理実習を行った。

●理科 植物に関する調べ学習の授業（1年理科9月実施）

情報カードの形式で、図書館にある蔵書の中から植物を調べる授業を行った。はじめに教員が調べる書架を紹介し、調べた本の中から植物名の由来や実用方法を調べた。4月からガイダンスを行っていたので、スムーズに調べ学習を進めることができた。1時間の授業の中で4～5枚程度の植物調べカードを完成させていた。

●国語 国語の学習での取組「POP作り」

全学年・全学級で「POP作り」の取組を行った。図書館の本を利用し、自分が選んだ本の紹介カードを作り、廊下に掲示し読書を推進した。低学年は高学年のPOPを参考にしながら作成を進めた。また、授業での活動だけではなく、冬休み中に図書館で借りた本の中から一冊を選び、その本についてのPOPを作成する課題をもたせた。

●総合的な学習 行事での取組「職人体験」

6年生の修学旅行では、キャリア教育の一つとして職人体験を行った。その事前学習では、自分が体験する職・職人について図書館の本を使って調べた。また、修学旅行の係活動において、訪問先についての情報を図書館等で調べ、修学旅行のしおりにまとめ、発表するための資料とした。

●保健体育 運動会、学習発表会での取組

運動会では、速く上手に走るための方法を本で調べ、体育の学習に生かす取組を行った。学習発表会や「おはなし会」では、劇や読み聞かせで扱った物語をもう一度借りて深く読

み返す活動を行った。

●国語 「本は友達～私と本」と関連して（中央図書館で）

「どんなときに」「どんな本を」など、これまでの自分の読書経験を振り返り、自分がよく読むジャンル、反対に読む機会が少ないジャンルなどを捉えた。それをもとに、本のガイドブックを活用し、自分が読んでみたいと思う本を何冊かピックアップした。次に、司書の方から、図書館における本の配架のきまりや工夫などを教えていただいた。さらに、くじで引いた数字の棚から、興味のある本を選び、奥付を見ながら、「出版社」「著者」「書名」「一言メモ」などをカードに記載する。最後に、事前に選んだ読みたい本のリストを参考にして、本を選ぶ前半の学習で本の並び方を理解したうえで、自分が読みたい本を探す活動を行った。なかなか見付けられない児童については、司書の方に声を掛け一緒に探してもらい、図書館の方と関わりながら本を選ぶ姿が見られた。事前に選んだ本がなかったという児童についても豊富な蔵書から読んでみたいと本を選び出すことができた。

●総合的な学習の時間 「働くってどんなこと」と関連して（中央図書館で）

あらかじめ図書館の方に児童が興味のある仕事をお伝えし、関連の本を揃えていただいた。当日は、まず、司書の方に複数の本を参考にすることで、仕事を様々な角度から見ることを教えていただいた。その際、例を挙げながら説明していただいたことで、その後の活動で児童が選書をする際に役立った。また、「臨床心理士」「審判」「パティシエ」など、あらかじめ考えていた仕事について、本から情報を集めた。事前に用意していただいた棚から選んだり、自分で選び出したりと選書の方法は様々であったが、複数の本を参考にしながら情報を集める児童の姿が多く見られた。調べた事柄は、その後の進路探究学習の発表会の際に、ポスターにまとめた。

●総合的な学習の時間 ビブリオセッション

3年生総合的な学習の時間「生き方を考える学習」ではビブリオセッションが行われている。書評のビブリオバトルの本校バージョンともいえる方法で、本校の教師が名付けた。ビブリオセッションでは、「生きる」ことをテーマにした本を生徒各自が選んで読み、セッションシートにまとめ、セッション（発表・交流）を行うものである。全員が発表する班内セッションを経て、学級の代表者を決め、学年全員の前で発表した。全員のセッションシートは廊下に掲示した。学年セッションではフリップを用いた。

●全学年総合的な学習の時間 知識を広げるための学習

キャリア教育の一環として、職場体験を実施している。意欲をもって調べようとする姿勢や、読むことによって疑問を解決する楽しさを味わう力を身に付けることを目的に、訪問場所における仕事の内容や職種に関わる留意事項等について、読書を通じて情報を収集している。学校図書館の書物はもちろんであるが、学校図書館情報センターの「寄託図書」を積極的に活用しながら学習を進めている。収集した情報は、職場体験当日に学んだ事柄や感じた事柄と合わせて事後学習のまとめにも生かしている。

●国語 小論文対策につながる読書指導

大学等の AO 入試・推薦入試などで、小論文や作文を必要とする生徒が毎年 120 名程度いる。その対策として、進路室の蔵書を加えた「小論文対策図書ファイル」を作成し、各教室へ配布して活用を図っている。「継続は力なり、朝 10 分間でも効果は絶大。付け焼刃では小論文や記述式に対応できない。遅刻も減った。落ち着いた雰囲気ですべてが始まることは素晴らしい。」というのが、朝読書に対する多くの教員の実感。「小論文対策図書ファイル」は3年生を中心に活用されている。推薦本の紹介や図書館オリエンテーションは司書や図書局の尽力によるものであるが、その効果はとて大きい。図書コーナーは貸出数こそ多くはないが、生徒が本を手をしている姿がよく見られ、環境づくりに役立っている。

D)地域外部人材活用【読書】

●ポロップひろば『子育て講座』の開催

地域の未就学親子に幼稚園を遊びの場として提供する『ポロップひろば』を毎月開催している。幼稚園で遊ぶだけではなく、子育てに役立つ情報提供の場としても活用していただけるように、子育て講座の開催にも取り組んでいる。札幌第一こどものとも社代表の藤田春義氏を講師に招き『親子で絵本を楽しもう』をテーマに、年齢に応じた絵本の選び方、親子での楽しみ方をお話ししていただいた。子どもが絵本を好きになるのは身近な人と一緒に絵本を楽しむことが大切であることや、子どもが膝の上に座ってあるいは寝る前の読み聞かせのひと時が、親子の温かな思い出となり健やかな成長を育む礎の時間となることが伝わり、そのような時間を大切にしたいという感想から意識の変容も伺える。

●校内研修会でのガイダンス研修

校内研修会において、「学校図書館を活用した授業の取組について」と題して、全国図書館協議会スーパーバイザーである佐藤敬子先生を迎え、「学び方の指導」に重点を置き、本の分類（NDC）、目次の活用の仕方などの研修を実施した。学び方の指導（情報教育）は全ての教科・領域はもとより、図書館内外で指導するなど、全校体制で計画的に実施していくことが重要であるという認識を共有することができた。

●読み語りユニット「ほらね」

PTA 行事の祭の中で「お話の会」主催の紙芝居の読み聞かせの他に、読み語りユニット「ほらね」をお招きし、楽器を用いながらの読み語りのコーナーが設けられた。初めて見るうちわ太鼓の大きさに驚いたり、さまざまな音色に耳をすませたり、子どもも大人もお話の世界に引き込まれたひと時だった。校長・栄養職員・「お話の会」のメンバーで、50インチのテレビ画像に本を映しながら行い、全校生徒が集中して話に聞き入った。読み聞かせの発展として、3年生対象の「読書会」も行い、担任・教頭もペープサートやエプロンシアターに参加し、子どもたちを楽しませた。子どもたちの読書への関心は、隔週の読み聞かせの効果もあり、高まってきている。図書室の利用も活発になり、読書の選択の幅も広がった。

●図書選定と廃棄本の確認

全校読み聞かせの会では、夏休み中に図書館アドバイザーに来校していただき、廃棄本の基準を図書開放司書さんと確認することができた。

●札幌お話の会平野美和子さん 絵本についての講演会

札幌お話の会平野美和子氏による講演会を開催した。幼児のイメージする力や感性を磨き豊かな心を培うように援助すること、保育者が語りをたくさんしていくことの大切さなどを学び、幼児への読み聞かせの際に実践した。

●地域の読書アドバイザー

読み聞かせに関わる保護者は「お話の会」のメンバーだけでなく、PTAの係の方が単発的に行っているが、その中から「お話の会」に加わる人も出てくるなど、ボランティアの輪も広がってきている。「お話の会」の方々からの要望で、地域の読書アドバイザーを招き、より質の高い読み聞かせのための研修会を開いたが、研修会参加の対象を広げて行う必要がある。さらに、地域の方と読書活動においても連携を深めていくことができるような手だてを考えていきたい。

●図書ボランティアを活用することで、児童の読書活動を促進する取組

数多くの学校で、ボランティアが活躍している。「豊かな心」の具現化の方策の一つとして、「本に親しむ子」を目指して、「発達段階に合わせた読書習慣をつける」ことと、「読書量を増やす」ことに取り組んでいる。「朝読書」や「全校読み聞かせ」に取り組み、保護者や地域の図書ボランティアさんたちの協力のもとで「読み聞かせ」を行ったり、「大型紙芝居の上演」や「ブラックライトシアター」などの読書活動を行ったりすることで、子どもたちへの啓発に取り組んでいる。また、読書会をボランティアと連携して取組むことで、今まで以上に読書会の内容を深めることができた。ボランティアが持っている知識を活動に生かしていくことで、生徒の活動がより生き生きとしたものになった。

1-3 教育委員会以外の関係機関との連携

(1) 雪

① 札幌市他機関との連携

● 札幌市建設局雪対策室

4年社会科「雪とくらす」総合「雪について詳しくなろう」では、土木センター職員による出前授業を行い、札幌市の除排雪に携わる人々の苦労や工夫に気づき、自分たちにもできることについて考える機会となっている。雪対策室主催の「雪と暮らすおはなし発表会」に参加するため雪への理解を深めるとともに、プレゼンテーション能力の向上を図ることができた。様々な冬のイベント開催時に、サプライズで『ゆきだるマン』『ゆっぼろ』『おっほん』『ちっきゅん』が登場し、子どもたちが大喜びする姿もみられた。

● 土木センター

スノーキャンドル制作において、土木センターからスノーブッシャー、雪かきスコップ、バケツなどの道具やキャンドルを提供していただいている（雪対策室と共同）。また、出前講座をお願いし、除排雪のしくみや問題点など、プレゼンやDVDを通してわかりやすくお話しいただいた。また、札幌ゆきだるマンプロジェクトについて知り、グラウンドに耳つきの雪だるまを並べたり、川柳を作ったりしようという意欲へとつながった。

● さっぽろ健康スポーツ財団

さっぽろ健康スポーツ財団主催のウィンタースポーツ体験に全園児で参加した。その中の『色雪遊び』のコーナーで、香り付きの雪を見て材料を確かめようとする年長児。入浴剤だと分かると「幼稚園でもできそう！」と、翌日家庭から持参した。これまでの絵の具で付けた色と違い、優しい色合と良い香りという新しい刺激が周りの友達にも広がり、『アイスやさん』という共通のイメージの遊びにつながった。

● 札幌市観光文化局スポーツ部（現スポーツ局スポーツ部）

歩くスキーに挑戦しよう（5年生冬の滝野宿泊学習）では、札幌市観光文化局スポーツ部主催のクロスカントリースキーインストラクターを講師とした「歩くスキー出前授業」を利用。インストラクターの指導による歩くスキー体験活動を通して、冬のスポーツに親しみ、強い体をつくることができた。

● （一社）札幌観光協会：さっぽろ雪まつり雪像製作

授業の一環で「さっぽろ雪まつり」の雪像案を考案し、毎年大通公園にて中雪像を制作している。雪像を通して市民や観光客に「札幌らしい特色ある学校教育」の三つのテーマやキャラクターを理解してもらい親しんでもらえるように、全員で協力し計画的に制作を進める。制作中の様子は、テレビ局に取材され代表生徒が出演した。

●美香保体育館：3年生〔総合的な学習の時間〕「冬も元気まんてん」

美香保体育館の見学に行ったことを思い出し、冬期間はスケート場になること、また以前、札幌冬季オリンピックが開催された場所として、当時のビデオを見ながら冬のスポーツ競技に対する意欲をもたせた。事前に、カーリングの道具を紹介し、カーリング競技やゲームについて学習することで、カーリングに対する意欲が高まっていった。札幌カーリング協会の方十数名を講師として招き、美香保体育館でのカーリング体験学習として細かく指導を受け、楽しく活動することができ、ミニゲームを通してカーリングの楽しさや仲間と共に活動するよさを味わうことができた。

②民間企業や札幌市以外の機関との連携

●東海大学札幌校～厳しさの中で確かに息づく森林の冬～

東海大学札幌校舎所有の広大な広葉樹林「光風園」で、4年児童は、冬には、深い雪の中、スノーシューを履いて自然観察活動している（例年スノーシューは、さっぽろ健康スポーツ財団から借用）。

●札幌管区气象台

札幌管区气象台を訪ね、職員のみなさんからお話をいただいたり、観測の機器に触れたりした。天気予報のしくみについて興味・関心を高めるとともに、雪が降る仕組みについての知識を身に付けることができた。その際、雪の結晶を簡単に観察できることを教えていただいたので、グラウンドで実施した。黒の色画用紙を外の空気で作った冷やし、降ってきた雪を受けてルーペで拡大して観察した。それぞれの形が織りなす美しさや面白さにふれ、一人一人が様々な感性を働かせながら観察することができた。

③地域ボランティア・保護者等との連携

●親父の会（PTA 後援）との連携

学校正面玄関前に雪像とスノーキャンドルの作成に際して、保護者と先生の会「おやじの会」が協力しながら実施しました。冬季の保育園との交流が計画的・継続的に行なわれ、親父の会主催（PTA 後援）の「アイスクヤンドルを灯す会」では、親子で100名ほどの参加があり、地域の行事である雪まつりなどに参加する子が大勢いる。キャンドルの灯りがゆらめくととても幻想的な雰囲気を感じることができた。多くの子ども、保護者だけではなく、地域の方もたくさん訪れてくれる行事となっている。

●区の土木部や地域の企業との連携 除雪車の試乗体験会

除雪車の試乗体験会を区の土木部、大成ロテックのご協力をいただき、開催した。4年生の社会科の学習の一環として、除雪車の試乗体験会を西区土木部、大成ロテックのご協力をいただき開催する。一人一人除雪車に乗せていただき、視界の悪さや、寒い中での作業を実際に体験することができた。学習した内容を自分の目で見て、体験することで、子どもの興味・関心が一層広がるような体験会になった。

●消防署や地域の消防団と連携

生徒会執行部が主体となり、全校にボランティアを呼びかけ、消防署や地域の消防団と連携して生徒が消火栓周辺の公道の除雪を行う。3学期に4～5回実施し、のべ200名以上の生徒が参加する。

●生徒会との連携 雪遊びボランティア活動

幼稚園にて毎年開催される「雪遊び・中学生と遊ぼう」（未就学児の子育て広場「ポロップひろば」と区の子育てサロン「わくわくぽけっと」が生徒会と連携して共催）には多くの生徒が応募する。その中から20名以上の生徒が、汗ふきタオル・水筒・スキーウェア・帽子・手袋で身支度を調べて参加し、地域の幼児と一緒に雪遊びを行った。その後は園内で先生達と協力して紙人形劇を披露した。

(2)環境

①札幌市他機関との連携

●札幌ドーム 5年生社会科「私たちの生活と工業生産」

毎年5年生が札幌ドーム見学を行っており、札幌ドームの目的や施設の説明、働く人の様子を学ぶ他、環境への配慮についても学習する。特に節電については、LEDの照明や電光掲示板の採用、そして敷地内の太陽光パネル設置で、ドーム内の照明の一部として太陽光パネルで発電された電力が使われていることなど見学を通して学ぶことができた。

●青少年科学館 3・4年総合的な学習の時間

4年「くらしとエネルギー」では、電気は生み出すことができるということをつかみ、様々な発電方法について、追究していくことをねらいとしている。現地学習で青少年科学館を訪れた。理科で学んだ太陽光発電の他に、風力発電や水力発電等について、実際に触ったり発電したりできる設備を通して学ぶことができた。

●円山動物園

6年総合的な学習の時間では、円山動物園を訪れることで、学校の外に視野を広げる。設備の中に太陽光発電や風力発電、バイオマス発電などの設備があり、環境を意識した活動がなされていることを、見学を通して知ることができた。

●北方自然教育園

白川の北方自然教育園にて、サクランボの収穫を行った。体験農場で職員の方に、サクランボの実の付き方や、収穫方法を教えていただいた後、全校児童で協力してサクランボを収穫した。

②民間企業や札幌市以外の機関との連携

●パナソニック

4年理科「電気のはたらき」の学習において校舎に設置されている太陽光パネルを実際に見て、設置されている条件（太陽との角度、方向、金額等）から「どうしてこんなに金額が高いのに、たくさんのパネルを取り付けるのだろう。」という問題をつくった。子どもは、問題を解決するため、パナソニックの出前授業を通じて、太陽光パネルの仕組み、省エネ、設置した人の思いや願いを学んだ。

●巴農場（江別市）

江別市にある巴農場で、枯れた茎から鞘を手で取る大豆の収穫を体験した。また、機械を使った収穫も見学した。手作業の大変さを実感し、広い畑では、機械を使わなければ大変であることを学ぶことができた。収穫後は、子どもの疑問について、農家の方が丁寧に答えてくださった。

●篠津土地改良区（水土里ネットしのつ中央）と近隣の農家

学校での事前学習に加え、現地の「泥炭資料館」のスライド・展示で水田作りの取り組みや苦勞を学んだ。その後、改良区や近隣の農家の方々と一緒に田植え体験を行った。鎌の使い方や稲穂の束ね方、干し方を事前に学習し、改良区や近隣の農家の方々と一緒に実際に稲刈りの体験を行った。また、土地改良区の代表の方々が来校し、精米した「ゆめぴりか」を90kg贈呈いただき、4年生が感謝を伝えるための贈呈の会を企画した。また、収穫した米は「篠津米給食」として全校でいただいた。

●関ファーム（江別市）

江別市の「関ファーム」で、餌やり、搾乳、哺乳、トラクターの試乗を体験した。牛に直接接触するのが初めての子どもが多く、驚きと発見の連続だった。雄牛は食肉用として売却されることなどの説明から、食が命をいただくことだと分かり、子どもは食への感謝の気持ちを新たにできた。また、乳牛の体温を感じたり蹴られることを心配したりしながらの搾乳体験からは、命の温かさと命を扱うことの大変さを実感した。また、関ファームの方からは、乳牛を飼育する努力や苦勞、喜びなどをお話しいただいた。子どもは、生活を支えている食の生産者の話を聞き、自分たちの食生活を見つめ直した。

●さっぽろさとらんど農園

さとらんどで収穫体験を行った。子どもは、なす、ピーマン、オクラ、ズッキーニ、さつまいもなどを収穫して、「すべすべする。」「ちくちくする。」「毛がはえている。」と、野菜の手触りを感じたり、「自分で収穫した野菜だから食べてみよう！」と苦手だった野菜を食べたり、五感を使って活動した。さとらんどでの収穫体験の後、「臭覚」を使って何の匂いかを考える学習を行った。野菜にも匂いがあることを思い出し、「クリームのおいがる。」「レモンジュースのおいだ。」などと生活経験と結び付けて考えた。

●札幌グランドホテル

札幌グランドホテルの総料理長を招いて味覚の授業を行った。子どもは、味の基本となる四つの要素（「塩味」「酸味」「苦味」「甘味」）に、日本独特の第5の味と言われる「うまみ」を加えた五味について考えた。塩、米酢、チョコレート、グミ、だしの匂いを嗅いだり、食感を確かめたり、実際に味わいながら、味について理解した。一流ホテルのシェフが食べることの楽しさを分かりやすく教えて下さり、本物の味を学び、体験するよい機会となった。

●米林農園（新篠津村）社会科「くらしを支える食料生産」

主食である米の米袋から、そこに記載されている産地を知り、米がどのような場所で作られるのかを調べるために、新篠津村米林農園に行き田植えを体験した。社会科「米づくりのさかんな地域」の学習では、米林さんと交流を行い、稲作の学習を進めた。また、米林さんからいただいた稲を各学級で育て、米作りカレンダーと比較しながら学習を進めた。収穫の時期には、再度新篠津村で稲刈り、脱穀体験を行った。自分が植えた稲の成長を実感し、稲穂の取り出し方を体験した。

●北海道ガス株式会社

エコクッキングでは、北ガスから栄養士の方に来ていただき、食材を無駄にしない、エネルギーを上手に使う、片付け時は少ない水で洗いものをするなどのポイントを学び、その場で実践した。また、米を炊いている間は学んだばかりの知識を生かすエコクイズに挑戦し、学びがより確かなものとなった。

③地域ボランティア・保護者等との連携**●石狩地区農協青年部連絡協議会（新篠津村）**

本年度より新篠津にて農業体験を行った。JA 石狩の青年部の方が窓口となり、本学習を行うことができた。子ども 10 名に対し 1 名の割合で青年部の方が指導に当たってくれた。新篠津は北海道でも有数の米どころであり、その農地の広さに子どもは圧倒されていた。

(3) 読書

① 札幌市他機関との連携

● 中央図書館

公立図書館の効果的な活用と本に親しむ活動の充実が図られている。また、さっぽろっこ読書プランに基づく実践の充実に取り組んでいる。日常における言語活動の基礎基本の育成と連携し、豊かな読書活動に向けて「紙芝居」や「絵本」を窓口にした研究実践を推進し、コミュニケーションスキルの向上を図る。また、紙芝居の読み聞かせ活動や本のしおりづくり、遊びやものづくりなどの本にかかわる簡単なワークショップ等、表現・体験活動を効果的に組み合わせる中で、日常的に本に親しむ心を育てる取組みが見られる。

● 区民センター図書室

区民センター図書室を見学して、蔵書や利用の特色にふれ、身近な地域の図書館のよさについて考える活動を設定した。

② 民間企業や札幌市以外の機関との連携

● 朝日新聞社

デジタル版新聞を朝日新聞社に、電子書籍を中央図書館に出前講座として実施していただき、図書局員が受講した。2学期開始からほぼ2週間、開館時間に希望者が電子書籍を学校図書館で体験した。電子書籍ではじめてタブレットを体験した生徒がほとんどだったが、ピンチアウト等の操作も軽やかに、印刷本にはないしかけ（絵本の絵が動く、BGMが流れる、動画が見られるなど）を楽しんだ。デジタル版新聞講習会は、情報の信頼性について考える良い機会になった。デジタル版新聞では印刷新聞にはない情報を24時間リアルタイムで入手することができる。デジタル版新聞にしかない機能に生徒の関心が集まった。

● 札幌ユネスコ協会連盟

ポートランドのリッチモンド小学校、マウントテーパー中学校、グラント高校のリクエストで15冊のデジタル絵本と6冊の教材を制作し、グラント高校の生徒が夏期研修にきている7月に発表会を行った。デジタル絵本と教材は、本校のWebページより閲覧、タブレットへダウンロードできるようにし、デジタル絵本による国際交流を図った。また、札幌ユネスコ協会連盟の「私のまちのだからもの絵画展」において、デジタル絵本の読み聞かせ会を行った。

● くすみ書房

くすみ書房社長久住邦晴氏を講師に、「町の本屋の挑戦～本にはすべての答えがある～」の演題で講演会を実施した。講演前日には全校道徳として、書店経営者としての久住氏の実績を知り、講演への意識を一層高めるために、久住氏についてのドキュメンタリー番組を視聴させた。また、図書局員がくすみ書房を訪問し、書籍配置の工夫等について学んだ。また、本校において久住氏によるポップ作りの講習会を実施した。

●北海道博物館

リニューアルオープンした北海道博物館の依頼で、札幌市の読書キャラクターの「おっほん」が新しい北海道博物館を紹介するデジタル絵本を2年生、3年生の選択授業で各1冊制作し、札幌市電子図書館よりリリースした。また、北海道博物館の展示室内で読み聞かせ会を行った。

●北海道環境財団

「生物の多様性とニホンザリガニ」というこれまで追っていたテーマをより深く探究する取組として存分に図書館の機能を引き出し、活用することができた。また図書館の人だけでなく、図書ボランティア、本校開放図書館司書の参加も得て図書館の利用指導ができたことも大きな成果であった。「コンピュータより本や新聞の方が調べたいことが書いてある」という感想を多くの子が述べていた。

③地域ボランティア・保護者等との連携

●保護者①

幼児に絵本貸出しの際、保護者に貸出しと回収作業をお手伝い（輪番制）していただき幼児の様子を目にできる機会とした。3・4歳では担任が子どもの発達や興味に合わせて貸出し絵本をピックアップし、そこから子どもが選ぶという方法をとっているが、貸出担当の保護者は、子どもたちが絵本を真剣に選ぶ姿から成長を感じたり、大切に選んだ絵本を家庭で読む時間を大切にしようという意識が芽生えたりしている。また、発達年齢や季節に応じた絵本の選び方を保護者が学ぶ場面にもなっている。5歳児は絵本コーナーのたくさんの絵本の中から、これまでの経験を生かし意欲的に自分で選定する。そのような姿を保護者が目にするすることで、幼児が読書の面白さを感じ、絵本を借りることが身近な活動となっていることを実感している様子が見られている。

●保護者②

参観日を利用し、親子で絵本の世界を楽しむ企画として、絵本を題材とした『親子絵本ワークショップ』の取組を行っている。教育活動で活用している月刊誌や大型絵本の世界を親子で再現したり体験したりすることによって、我が子が絵本のどのようなところに楽しさを感じているのか、絵本の内容からどのようにイメージを膨らませたり、自分たちの遊びや生活に取り入れたりしているのかなど幼児期の発達の特徴を理解することにもつながっている。

●地域図書館ボランティア

開放司書を中心に図書館ボランティアが定期的に装飾を更新した。「七夕」や「クリスマス」といった季節の装飾以外にも、「サッカーワールドカップ開催」や「日本人のノーベル賞受賞」など、話題になっている事柄に関する本を集めて掲示することで、子どもたちの興味や関心を高めた。また、図書委員会と連携して、おすすめの本を紹介するコーナーを設けた。自分のおすすめの本が紹介できるということで、図書委員児童はやりがいを感じ

ていた。さらに、開放図書館便りを通して新刊案内やボランティア活動の紹介をするなど、家庭や地域に向けて館内の様子を発信することが出来た。

●学校図書館アドバイザー

学校図書館アドバイザーに来校していただき、司書教諭と開放司書とともに廃棄本の基準や図書の選定を学んだ。両者の連携の大切さを教えていただいた。

●開放図書館ボランティア

開放図書館ボランティアによる読み聞かせや教職員による読み聞かせ、委員会活動での児童による読み聞かせを行っている。開放図書館ボランティアの方には朝の読書の時間に来校していただき、教室で本を読んでもらったり、子どもたちを集めて定期的に読み聞かせ会を開いていただいたりした。主に開放図書館ボランティアの方々をお願いしての活動であったが、教員による全校読み聞かせ活動も位置付けた。そこでは、教員と一緒にボランティアの方にも参加していただき、子どもたちができるだけたくさんの方と関わることができるような工夫をして活動を組むようにした。